

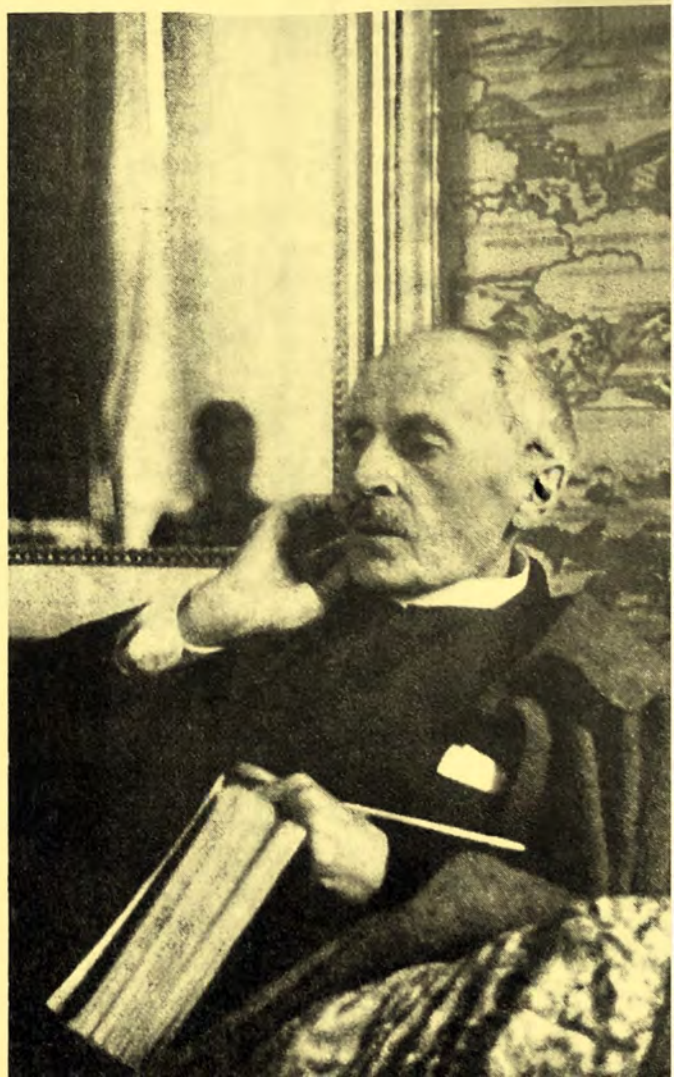
ユニテ

1995.3

22

ロマン・ロラン没後50年記念号

財団法人
ロマン・ロラン研究所





ロマン・ロラン没後五十年記念（一九九四・二二・二四）
写真（上）「また逢う日まで」スチール写真
（下）映画上映の日 尾楚善司（左）・講師 今江祥智（右）
（京都文化博物館の御協力で、おはなしと映画の会を開きました。）

目次

ロマン・ロランの聴いた音楽 彼の文章の背景にあるもの	中野 雄	1
神秘と政治	ベルナール・デュシャトレ (村上光彦訳)	8
——ロマン・ロラン、その思索と行動とのあいだ		
ロマン・ロランとフランス革命劇	河野 健二	30
私の科学とゲーテ	岡田 節人	37
ロマン・ロランとドイツ音楽	岡田 暁生	39
ロマン・ロランと日本人たち(一)	小尾 俊人	48
ロマン・ロランをめぐる デュシャトレ教授に訊く	ベルナール・デュシャトレ (村上光彦訳)	60
ロマン・ロラン研究所の活動		70
ロマン・ロラン没後五十年記念 1994年度 賛助会員、寄付者名簿		72
あとがき		73
Mystique et Politique	B. Duchatelet	1
Romain Rolland Entre la Pensée et l'Action		

ロマン・ロランの聴いた音楽

彼の文章の背景にあるもの

中野 雄

ブローグ

古本屋で見つけた小さな冊子が手許にあります。「レコード藝術年鑑1953」です。

黄ばんだページを繰ると「音楽名著紹介」という欄があり、評論家の木村重雄氏が「ベートーヴェン」の項でロマン・ロランの作品を激賞しているのが眼につきます。「若しあらゆる音楽的文献からただひとつを、と云われれば躊躇なしに、はくはこれらを選ぶ」という言葉が、この時代の音楽関係者のロランへの傾倒ぶりを象徴しています。

昨今の評論家は、ロランの著作について、その感情移入の激しさを指摘し、より冷静かつ客観的な分析手法を^{しやうじ}懲^{ちやうじ}してきているようです。彼の研究が諸文献に引用される頻度も著しく減ってしまったように思われてなりません。表現の仕方に、情熱家ロランの個性が反映しているのはむしろ当然でしょうが、それ以上に、彼が生を承け、青春時代を送った後期ロマン派の時代風潮が、文章の背景に存在している事実も否定できないと思います。私は、本日、それらの時代背景を「音楽の演奏様式」という一点に絞って考察し、ロランの作品に顕著な、「感動表現」の必然性に結びつける作業をさせていただきたいと思っております。

「演奏家」と「聴衆」の誕生

その昔、ハイドン、モーツアルトの時代（一八世紀末まで）の音楽家は、王侯貴族または教会の傭われ人ともいべき立場にありました。彼等の仕事は、主命により催事のための音楽を書き、それらを演奏することにあつて、演奏の対象は「特定少数」の關係者に限られていました。彼等は、自らの作品を、自分自身または御主人に傭われている楽団や音楽家と演奏していたわけで、この時代、若干の例外はあるにせよ、作曲家コンサーター演奏家という図式が成立していたということが出来ます。従つて、この場合は、演奏の質の良し悪しはさておき、テンポ、フレージングその他、楽曲の「解釈」にかかわる諸問題は發生の余地がなかつたと言つてよろしいかと思ひます。但し、環境は決して恵まれたものではなかつたようで、教会のための音楽は別として、今、我々が耳にしている古今の名曲の多くは、領主の座興や、食卓・宴席のBGM（バック・グラウンド・ミュージック）として演奏されていたと言つても過言ではありません。映画「アマデウス」には、そのあたりの風景が、若干デフォルメされてはありますが、いきいきと描かれています。

転換は一九世紀末、フランス革命を契機として起こります。富と政治権力を獲得した市民階級が、新たに芸術のスポンサーとして登場して来たのです。貴族や教会の従僕に過ぎなかつた音楽家の地位が、独立した「芸術家」として確立します。端緒はすでにモーツアルトにも見られるのですが、象徴的な存在はベートーヴェンでしょう。しかし、ふたたりとも過渡期にその人生を過したために、それ相当の苦勞を味わつたであろうことは、容易に想像が付きま

す。

作曲家演奏家という図式は、この時代にも続いています。ただ、この頃になると、彼等の音楽は、貴族・教会・富豪といったスポンサー目当てのものだけではなく、不特定多数の「聴衆」を対象としても書かれるようになり、当然の帰結として「コンサート」が頻繁に開かれるようになりました。

「コンサート」とは言っても、当時の演奏会は現在のスタイルとは随分異なつたものでした。第一に、プログラムはほとんど作曲家の演奏者ひとりのもので、他人の作品が演奏される機会は極めて稀でした。音楽会は、「作品発表会」の別名と称してもいい状態だったので。巷間、悪妻の典型としてハイドンの夫人が挙げられ、亡き夫君の貴重な手書譜を壁紙の下張りに使つたことが非難されていますが、本人が死んでしまつて演奏される見込みもなく、一文にもならない楽譜を、彼女が紙屑同様に扱つたからといつて、現代の感覚で糾弾するのも如何かと思われまふ。第二に、当時の聴衆は現在の聴き手とは質を異にし、コンサートに犬を連れてくるわ、演奏の最中に飲み食いし、煙草を吸い、おしゃべりをするわで、森閑とした静寂の中で音楽に神経を集中するなどという演奏会は、皆無とはいえないまでも、極めて稀でした。良くて歌舞伎見物、ときには両国国技館における相撲見物の情景を御想像いただければ、当たらずとも遠からずだと思います。

音楽会の内容を一変させる「事件」の弾き金を引いたのは、メンデルスゾーンです。

作曲家であるとともに、偉大な指揮者でもあつた彼は、一八二九年三月一日、ベルリンのジングアカデミー（合唱協会）においてバッハの「マタイ受難曲」を復活演奏し、大成収めました。バッハ自身の初演から、数えて一〇〇年の歳月が過ぎておりました。この偉業を契機として、古典復興の動きが高まり、過去の巨匠達の作品の掘り起こしと再演の試みが、頻繁に行われるようになります。自作にこだわらない「演奏家」誕生の下地が出来上がったわけです。しかし、主導者が作曲家達（例えばメンデルスゾーンやシューマン）であつたためか、再演は当時の美感に基いて行なわれ、原曲には容赦ない改変の手が加えられました。前述の「マタイ」も原曲通りの演奏ではありませんでしたし、バッハの無伴奏ヴァイオリン・ソナタなどは、不完全な作品と見做されて、ピアノ伴奏が書き加えられたりしています。

内容はともかくとして、ウィーン楽友協会のコンサートにおける「過去の作曲家」の作品演奏比率は、一八一〇年

代の二〇%前後から、一八四〇年代の五〇%台へ、そして一九五〇年代の八〇%台へと急上昇を遂げています。この動きを支えたのが勃興して来た市民階級、特に層に厚味を増した中産階級の知識人達でした。我々が現在、日夜体験しているコンサートの形態は、概ね一八七〇年前後に確立したと考えてよいと思います。

音楽家のサイドから見たとき、この流れを加速したのが所謂ヴィルトゥオーゾⅡ名人演奏家Ⅱの輩出であつたといふことが出来ます。ヴァイオリンのパガニーニと、ピアノのリストはその代表格で、ふたりとも空前絶後の超絶技巧で聴く者を魅了しました。このふたつの楽器に関する演奏技術の殆んど全てが、このふたりの時代に開発され尽くされています。「作品」に加えて、「演奏」自体が人を惹きつけ、ビジネスとして成り立つ時代が到来したわけですから、「演奏家」と「聴衆」の誕生でした。

「楽聖」の思想

一九世紀後半にその基本型が出来上がった「近代のコンサート」の特色は、「古典を弾く演奏家」と「真面目な聴衆」の組み合わせです。

一九世紀前半、「演奏家の時代」の黎明期は、技術偏重の時代でもありませんでした。聴衆は巨匠・名人の神技に酔い、アクトバットまがいの演奏に拍手喝采を惜しみませんでした。しかし、やがて、反省の時期が巡って参ります。名技の洪水と、その虚しさに飽きた聴衆は、「作品」に注意を集中するようになりました。過去の作曲家の作品研究はもとより、生涯や思想についての探究も積極的に行なわれ、業績が再評価されるようになったのです。

音楽の流れとしては、王道に戻つたように思われるのですが、物事の常として、ここでも行き過ぎ（オーバー・シュート）は避けられませんでした。作品の尊重も度が過ぎると、それを作つた作曲家の神聖視につながりかねません。そして事実、一九世紀末から二〇世紀前半にかけての数十年間は、「楽聖の時代」でありました。特に、独逸系のメ

イン・ストリームにあるバッハ、モーツァルト、ベートーヴェンに対する敬意は、絶対的なものであったと言えます。真偽とりまけて幾多の伝説が生まれ、彼等は神格化されました。俗人的な側面は無視されるか、ときには意図的に修正までされます。モーツァルトのカノンK231の卑猥な歌詞が、全集版では健全な言葉に変えられていたり、ベートーヴェンの「月光の曲」伝説（実は創作）が国定教科書に載ったり、偉大な姿の肖像や彫刻が作られたり、事例は枚挙に暇ないほどです。

このような行き過ぎはありましたが、「楽聖」の思想は、我々人類に計り知れない大きな贈り物を遺しました。それは、精神性の高い「偉大な演奏」です。作曲者と作品に対する敬意が最大だった時代、演奏家達は、まさに神に仕えるような態度で作品に接しました。貴族社会の残影がまだ失われなかつた今世紀初頭の頃、今ではもう死語に等しくなつた「高貴」（ノーブル）という言葉にふさわしい演奏が、ヨーロッパでは聴くことが出来ました。ロマン・罗兰研究所の講演会で、その一部を御披露させていただきましたフリッツ・クライスラーのヴァイオリン（ベートーヴェンの協奏曲）、カペー弦楽四重奏団の室内楽（同・後期の弦楽四重奏曲）などはその一例です。その他にも、ヴァイオリンのエネスコ、ティボー、ピアノのホルター、チェロのカザルスなど、最初の一音を耳にしただけで身仕舞いを正さざるをえないような音楽が、当時のパリやベルリン、ウィーンなどでは演奏されていたのです。幸いなことに、古いSP録音ではありますが、私共はその一端を今でも確認することが出来ます。私は、音楽大学で講座を持つており、時折学生達に聴かせるのですが、音の出ている間、教室は水を打つたように静かになり、講議の終つたあと、必ず何人かの学生が私の許に来て、「先生、何故こういう演奏が今聴けないんですか」と質問して参ります。

ロマン・罗兰が、その青春時代、魂の開花期にふれた音楽は、そのような演奏でした。神々しく、精神の緊張度の高い音楽に日夜接することによって、彼の芸術観がどのように形成されていったか、想像に難くありません。隔絶した知性とともに、ひと一倍の情熱の持ち主でもあつた彼の文章が、ベートーヴェンについて語るとき、燃え盛るよ

うな表現になったのは当然の成り行きだったと、私は思います。

彼自身は、「私はいささかも理想化をしない……この眼で見るままの人間を語る」と、「ベートーヴェン・偉大な創造の時期」の冒頭に記していますが、現代の冷静な学者・評論家は、決して肯定しないでしよう。私個人は、感動の余りにも薄い現代の文献に音楽の危機を感じており、「思い入れ」の大切さを再認識すべき時期が、演奏にも、評論にも来ていると考えています。

「復活」への祈り

ロランの生きた時代の演奏様式は、「後期ロマン派」のそれとして分類されています。この時期、勿論行き過ぎや、矩を越えたデフォルメがあつたことは否定できませんが、奏者の基本姿勢は「楽聖に托して己れの心を語ることにありました。」「楽聖に対する己れの想いを語ること」であつたのかもしれない。それ故に、演奏される曲が、常識で考えられる以上に神秘的な佇まいを見せることがありました。先に挙げたクライスラーのベートーヴェンがその典型であり、カザルスやエネスコのバッハにも、至高の、宗教的と言つてよいほどの精神の高まりが感ぜられます。両方とも、作曲家三〇代半ばの作品でした。その、余りにも立派すぎる透明清澄な響きを不審に思い、「原型」を探ろうとする動きが出て不思議ではありません。「客観的」「学術的」手法の登場です。

三〇代のバッハの作つた舞曲をカザルスが弾くと、人生の晩秋の香りが漂う。舞曲は文字通り舞曲であり、もつと軽やかなものである筈だ。こんな主張がこころ一年ほど盛んになり、ピリオド楽器と称する作曲家存命当時使われた楽器によるコンサートや、CD録音が人気を集めるようになりました。ロランの時代、ロマン派や表現主義的な演奏に反撥して、新即物主義的な思想の影響のもとに、ひたすら楽譜に忠実な演奏を標榜する音楽家が出はじめました。指揮者のトスカニーニやヴァイオリンのシゲティ、ピアノのギーゼキングなどです。一世を風靡したこの風潮の

掃結が、ピリオド楽器による原典復帰であることは申すまでもありません。

近頃、指揮者のフルトヴェングラーをはじめとする前述の巨匠達の演奏を、「後期ロマン派の美意識」と評して、歴史上の、骨董品であるかの如き取り扱いをする美学者まで出て参りました。しかし、僅か一〇分そこそこの短い時間ではありましたが、講演の当日、京都の日仏学館で響いたクライスラーやカペーの音楽は、決して歴史の彼方に押しやられて然るべきものではなかった筈です。それどころか、今、我々現代人が忘れ去った大切なもの、失ってしまった何物かを強烈に呈示してくれたように、私には思われてならないのです。そうでなくては、講演終了後の、私自身がたじたとするほどの、聴き手の皆様の反応はなかったと思います。年齢の幅は一〇代から七〇代まででしたが、感動の「質」は判で捺したように同じでした。

その頃演奏された音楽が過去の遺物視されて、忘却の彼方に押しやられかけているように、ロマン・ロランの作品に対する関心も、近年、日々薄れているように思われてなりません。私は、音楽にも、文学にも、研究にさへも、情熱と感動を取り戻さなくてはいけないと、固く信じております。

(昭和音楽大学講師
レコードプロデューサー)

神秘と政治——ロマン・ロラン、その思索と行動とのあいだ

ベルナール・デュシャトレ

村上光彦訳

一八九七年の『聖王ルイ』は、刊行された戯曲としてはロマン・ロランの最初の作品ですが、彼はそのなかで〈神〉への信仰を謳い上げています。ところが彼は、一九三五年にはモスクワへの旅をして、公的にスターリン主義ロシアの擁護者という印象を与えました。先のロランから後年のロランに至るまで、彼はなんという道のりを歩き通したことでしょう！ この人は、これほどまでも変わってしまったのでしょうか。これほど別種の顔を見せたとは、どういふふうに説明すべきでしょうか。

友人たちにとつてさえ、ロマン・ロランは矛盾して見えたのでした。それでいて、彼のうちにはある恒久性を感じられます。この人は一八六六年から一九四四年まで生きて、そのあいだに〈歴史〉は二度もヨーロッパを大混乱に陥れたのですが、彼のこの〈歴史〉のなかで何度か誤解のもととなる立場を取りました。そこで、この人を理解するには、彼が何度か発した警告を忘れてはなりません。

彼は「死して成れ！」というゲーテの座右の銘を信条といたしました。彼は何度か繰り返して、ある人物を評価するにはその人生の軌跡を全体として考慮しなくてはならない、と語ったのです。すでに自作の主人公ジャン・クリストフのことで、彼はこう述べています。彼を正しく理解するには、走行中のある一時間だけの姿を見るのではなく、

人生行路全体を眺めわたさなくてはならない、というのです。「彼があいついで取つたいくつもの形、彼の数々の見かけ上の矛盾、こうした変貌や矛盾を説明づけ、それらをたがいに調和させる内的法則。以上のことともの意味は、この一生が終末に達して初めて開示されることとなるのです。」

ロマン・ロランは幾編もの伝記を書きましたが、そのいずれにおいても決まって、矛盾した要素と見えかねないことどもを説明づけ、調和させる、その内的法則を示そうといたしました。ロラン自身のばあいについて、努めて同様のことを行つてみて、彼の参加の数々がつねにどんなにかある内的必然に、ある神秘的な世界観に応じたものだったのを見てみましょう。

ロマン・ロランはごく早く二十二歳にして、彼の〈信仰宣言(ワレ信ズ)〉を定めました。スピノザ、ワグナー、トルストイ、それにほかの何人かをもとにして、これを練り上げたのです。世界と生とについて自分なりの見方を作り上げて、一八八八年五月四日付の青年期の作品中で表明しています。Credo quia verum 「真実ナルガユエニワレ信ズ」がそれです。人はそれぞれ大いなる〈全体〉、すなわち〈生〉にして〈存在〉のひとかけらでありつつ、個々の生命を生きながら〈宇宙的な生〉すなわち〈神〉に参与するのです。自己は〈時間〉および〈空間〉の一部分でありつつ、これを超越し、かつ包み込む、宇宙的な〈一者〉と混ざり合うのです。「人間は〈神〉のかりそめの化肉である。」人はだれしも、いっせいに奏でられる交響曲のなかで自分の役割を演じなくてはならず、ほかの人たちを助け〈神性〉に参与させなくてはならないのです。芸術家の役割は、人間各自のうちに生動する神的な〈力〉を感じさせることです。人々のうちに〈生〉への〈信仰〉を目覚めさせ、彼らを結集してこの〈単一性〉を作り上げることこそ、人々を愛する仕方のひとつなのです。ロマン・ロランは彼の〈信仰宣言〉の結びでこう語っています。「唯一の〈魂〉がわれわれに生気を吹き込む。果てしなく広大で、多音的な〈魂〉が。そして〈愛〉こそは驚異的な和音の絆であり、その和音は数々の格闘から、また同時に数々の抱擁から成り立っている。〈愛〉は燃え立つ命である。これ

なくしては万事が「闇」なのである。」

こういうわけで、自己はいわば二重の生を生きるのです。それは、みずから超越し、かつ呑み込む（宇宙的な生）ないしは宇宙的（大我）に参与するのです。なぜかというところ、この（生）は個々の自己以前から存在していたし、それ以後も存在するでしょうから。しかし、この今日の自己があり、それが現在の生を生きる時間があります。そこから、ひとつの問いが生じます。それが問われる言い回しはそのおりおりに異なっていますが、究極的にはいつも同じ問いであります。すなわち、この現在時、つまりみずからの個々の自己の歴史をどのような仕方です生きるならば、（宇宙的な生）、つまり人間を超越する（神）と合一できるのか。どうすれば、自分なりに（いわば政治的に）行動しながら、みずからの（神秘的な）使命に忠実を守りうるのか。（宇宙的な生）の流れのなかからこうして取り出された個々の「自己」にとって、自由はどのあたりにあるのか。そのほかに、付随的ながら重要な問いが付け加わります。すなわち芸術家の役割は（参加することによって、政治的な役割を果たすために）行動に介入することなのか、それとも各自の存在のうちに現存する（神性）を感知させる（神秘的な幻を表現する）ことなのか、という問いです。

ロマン・ロランは生涯をつうじて、この問いに頭を悩ますこととなります。彼は天性、夢想的で観照的で、みずからの信念を人に吹き込むことを心がけていました。しかし何度か繰り返し、彼は行動に加わったのです。一九一四年十一月十日のマルセル・マルティネ宛ての手紙のなかで、彼は自分自身に正しい判断を下しています。「わたしは行動家ではありません。行動向きにできてはいなかったし、観照家として、見たり、理解したり、隠れたリズムやハーモニーを探るのが好きなのです。ところが、自主独立した見方への誠実を守ろうとし、また正義への本能に駆られたため、生涯に二度か三度、抑圧的で下劣な世論の無理無体な圧制に対抗すべく、態度を決めて行動に加わらずにはいられなくなりました。」同様にして一九二〇年四月二十二日には、ソフィア・ペルトリーニに宛ててこう書いています。「わたしは自分の名前（中世の武勳詩「ロランの歌」の主人公と発音が同じ）に引つ張られて人生を生きていった、

ということになるでしょうね。生まれつき、わたしはおとなしい男の子で、安穩にしていることしか願っていないかったです。しかしわたしの名前ときたら、こちらはおとなしくはありませんでした。突撃ラッパを吹き鳴らすのです。この名前が太鼓を打ち鳴らしながらわたしを引つ張ったのです。」

ここで後戻りして、以上の考察と照らし合わせながら、ロマン・ロランの生涯と作品とを眺めてみましょう。

そもその初めから、初期戯曲のなかでも、また戯曲『狼』（一八九八年）にいたるまで、彼はいうなれば、みずから（神秘的）使命に忠実です。彼の「眞実ナルガユエニワレ信ズ」を遵奉しつつ、（生）のリズムと（信仰）の役割とを表現した戯曲を書いています。

未発表のままの数編の戯曲（「オルシーノ」「パリオーニ一族」「ニオベ」「マントーヴァの包囲」「ジャンヌ・ド・ピエンヌ」）においても、刊行された戯曲（「聖王ルイ」「アエルト」）においても、ロマン・ロランは（生）の歌唱者となりました。そして一八九五年—一八九七年の時期に、当時の社会が退廃に落ち込んでいると見てとって疑問を抱くようになると、彼はこれに対抗して、未完に終わった「サヴォナローラ」を書くことで彼自身の信念と宗教的精神とを謳い上げます。彼はまさにこの時期にマッツイーニと社会主義とを発見しますが、なにも社会主義を政治とみなしたわけではなくて、社会を再生させて、これに新生命を吹き込むことのできる（信仰）とみなしたのです。

彼は「狼」（一八九八年）でもって初めてドレフユス事件のただなかに参加したとき、二つの尊敬すべき信念、すなわち一方は祖国への信念、他方は正義への信念が、コルネイユ風の相克に巻き込まれて衝突するさまを示そうと心掛けて、議論の幅を広めようと試みてもいるのです。ロマン・ロランが力を尽くして示そうとしたのは、敵対者は双方とも、それぞれの心を燃やす信念の名において、たがいに尊敬を勝ち取る権利を有するということです。彼はまさしくこの精神に立って、（革命劇）の初期諸作品を書きました。「理性の勝利」（一八九九年）、「ダントン」（一九〇〇年）、「七月十四日」（一九〇一年）がそれです。彼はフランス革命のうちに（歴史）の痙攣を見てとって、熱情に燃える主人

公たちとひとつ心になつて、彼らを押し流していった動きを感じ取らせてくれます。

それから彼は演劇をわきに置いて、最初の長編小説『ジャン・クリストフ』（一九〇三年—一九二二年）を書きました。そこにも同じ息吹が感じられますが、ロマン・ロランがとりわけ意を注いだのは、ひとりの自己がみずからの属している大なる（全体）と結びつきながら、少しずつ目を覚まして、みずからの存在を自覚してゆく様子を示すことでした。クリストフの意識はライン河の岸辺で生まれ、そしてクリストフは死ぬときに（大洋）に流れ込みます。この長編小説は、こうしていくつもの次元で展開してゆきます。一方には毎日の生活、波乱に富んだ地上的生活があり、小説家はこれに導かれて現在の歴史家となり、歴史の動態を観察します。他方には、クリストフの奥深い、真実の生があります。つまり彼は、ごく早い時期に別世界が存在することを発見します。この発見は彼が幼いころに教会で始まり、それから追求が続き、そのうち若者になった彼は、ふいに啓示に接します。「ヴェールが裂けた。目が眩んだ。稲光に照らされて、闇の奥に、彼は見た。彼は見た——神がいた。」クリストフ・クラフトは生涯をかけて、この（へ力）とこの（へ生）とを、みずからの担いゆく（へ神）の生を表現してゆくのです。

ジャン・クリストフはこのようにして、いわばこの二重の生を続けながら、超然としたまなざしを保つたまま、当時の生活に介入してゆくことができるのです。確認いたしますが、この主人公は創作者自身と同じく、いったん闘争に参加したあと、『燃える柴』からのちは行動から身を引きます。彼は、燃え立つ信念・躍動する生・精神的再生・新世界のための闘いをなすすべてを謳い上げましたが、晩年には芸術に身を捧げて、芸術が党派に利用されることを拒否したのです。ロマン・ロランは、このようにすれば正しい均衡を保てるものと考えていたのです。

見かけがどうあろうと、第一次世界大戦のあいだは、ロマン・ロランは本格的に政治行動に参加したわけではありません。それは彼が一九一四年十一月十日付の手紙で、マルセル・マルティネに述べたとおりです。「わたしは行動家ではありません。もしそうだったのであれば、これまでに示したのは別の仕方で、そのことを見せつけたことで

しよう。」状況を分析し、キリストとその弟子たちとの例を引き合いに出してから、ロマン・ロランはこの手紙を結んでこう語っています。「新しい信仰を建てるには、揺るぎなき礎石を据えなくてはなりません。すなわち、信仰を抱く偉大な魂たちが、あの初期の使徒たちの魂のように、ひたすらみずからの信仰に生きるために「……」すべてを犠牲にできる魂たちが必要なのです。わたしの使命は、社会主義のために直接働くことではありません（わたしはいかなる党派にも属していません）。そうではなくて、さまざまな党派なり祖国なりの偏見すべてをほんとうに立ち超えた、選ばれた精神を結集することに努めながら、間接的な仕方ですのために尽くさなければなりません。」

ある党是に荷担することなく、自由のために弁論し、かつ擁護し、ほかの人々が明晰なままでいられるように手助けすること。それはクリストフとオリヴィエとの闘いを引き継ぐことでした。これが第一次世界大戦中のロマン・ロランの行動方針となつたのです。彼はいかにも一九一七年に「自由にして解放をもたすロシア」に挨拶を送りましたが、そのあとすぐ、フランス革命の轍を踏んで行き過ぎに陥らないように警告しているのです。そして一九一八年一月九日には、彼をポリシェヴィキの戦列に組み込みたがるアンリ・ギルポーに向かって明言しています。

「わたしがわたしの愛と全精力とを捧げてきた自由、それは精神の自由なのです。この自由は、資本主義によつてと同じく、社会主義なりポリシェヴィズムによつても安泰になるわけではありません。社会主義とポリシェヴィズムとが達成する仕事は、物質の領域においては必要なことでも、精神の領域においては不十分なのです。わたしにとつては精神の自由こそ人生に唯一の価値を付与するものなのに、彼らにはあまりにしばしばこれを踏みこむのです。「……」わたしはというと、エラスムスやモンテーニュとともにあります。二人とも、よりよく闘うために行動から引き下がった人です。そしてわたしの考えでは、この二人は人類の未来の自由のために、宗教改革派よりも効果的に行動いたしました。」

彼は「精神」の独立を生きた人で、是が非でもこれを維持したいと思つたのです。彼はポリシェヴィズムを拒否し

て、ジョルジュ・デュアメルともども、アンリ・バルビュスやポール・ヴァイヤンクテユリエと対立します。彼の参加は、政治的であろうとはしなかつたのです。

「知識人としてのわたしの唯一の関心事は、真実を自由に探究することです。いずれの体制下でも、真実が厚遇されない点では同様です。クレマンソーがこれを圧迫し、レーニンがこれを圧迫し、多数の優位にもとづく国家すべてがこれを圧迫し、そして……少数独裁にもとづく国家はなおのことこれを圧迫します。社会闘争と精神の闘いとは別個のものなのです。……」

わたしは第二次、第三次、はたまた第四次へ行動のインタナショナルの埒外に身を置きつづけて、いつまでも「精神のインタナショナル」を主張していきます。両者は並び立っていけない世界なのです。「……」へ精神のインタナショナルは「……」へ国家へ、教会へまたは「党派」が支配する公的な統一主義のすべてを拒否いたします。」

ロマン・ロランは社会闘争には参加いたしません。作家として、みずからの作品によって行動しようと思うのです。「二冊の本はひとつの軍と等価です。」彼は一九一九年に「リリュリ」を、一九二〇年に「ピエールとリュス」と「クレランボー」とを刊行します。さいごに挙げた本は、戦争中にいったんは群衆の情熱に押し流されて埋没しながら、そこからみごとに脱却した人物を登場させています。そのときこの人物は、「絶対の平和と自由な良心とに生きる人」として立ち上がります。一八九七年に書かれた未完の戯曲「敗れし人々」の刊行にあたり、一九二七年七月の日付の入った序文が添えられましたが、これまたつぎのことを明らかにしています。すなわち、ロマン・ロランは「戦いを超えたところに」身を置きます。彼の義務は「自由な魂の確立」にあります。「これはいつさいの暴政との妥協を拒む魂であつて、その本来的な使命は数々の「反動」ばかりか数々の「革命」にも対抗して「精神の自由」という聖なる理想を擁護することなのである。」

ロシア革命の暴力に落胆した彼は、党派の不寛容を受け入れませんでした。一九二二年—一九二三年のバルビュス

との論争においては、彼は共産党の独裁を拒否して、（「革命」に反対してでも自由な思想を無傷なままに保とう）と欲したので。彼はそれからバリを去って、スイスのヴィルヌーヴに住みつきました。

彼はまた長編小説にとりかかつて「魅せられたる魂」を書き始めます。彼のもくろみは明瞭でした。作品が仕上がってから、彼はそれを明示することになります。すなわち女主人公のアネットは、どこにでもいて、だれでもそこに自分の姿を見てとりうるような存在で、ありきたりの暮らしを送ろうとしています。ところがクリストフのばあいもそうですが、目に見えないもうひとつの生、真実の生が、その生活に重なり合います。一九二二年六月十一日付の覚え書きには、アネットがどのような段階を踏んでゆくのか、彼女の生涯がどのような形を帯びることになるのかを明らかにして、その結末を予告してこう書かれています。「第五の形——最後の形（彼女はそのとき成熟の時期に達し、すでにこれを通り越している）——は神へと——無限へと向き直ることになる。それは奥深い神秘的生となるのだが……」そのなにもも外側からは透けて見えない。」こうしてアネットは、だれにも知られずに（地下に隠れた生）を送っていて、ときおり閃光のようにその生を自覚するのみですが、ようやくしまいに、最終的に（魅惑が破れる）瞬間がきて、この隠れていた生が開示されることとなります。ロマン・ロランはそのときすでに、のちに登場するブルノー・キアレンツア伯爵、すなわち（もろもろの魂と、それぞれの隠された価値とを判定できる）賢者を予想していたのです。彼は一九二二年七月十六日にはこう記しています。「この作品の形而上学のすべてが、男友だちとの最終的対話のなかで照らし出される。作品の残りの部分で問題になるのは、知られざる生——それでいて同じ生、奥が深く、暗くおぼろな、しかし同じ生——なのである。しまいに、それがなにもものが説明される。」ロマン・ロランは一八八八年の彼の（信仰宣言（ワレ信ズ））を、ずっと忠実に守っていたのです。「死こそは全能にして完全なる（生）である。それはほくに、ほくの真実の存在を返してくれる。ほくは幻影を支配しきれずにいるが、（死）がこれを完全にうち砕いて、ほくを（宇宙的な生）を意識する淨福のうちに浸らせてくれる。」ロマン・ロランはこ

の精神に添って、「アネットとシルヴィー」（一九二三年）、ついで「夏」（一九二四年）、しまいに「母と息子」（一九二七年）を執筆します。

これは彼がインドのほうへ向かった時期でもあつて、彼は一九二三年にガンジーに興味を抱いて伝記を書いていきます。彼はガンジーのうちに、暴力に頼らずに社会を変革できる革命家を発見したのです。彼はインドにいっそう関心を寄せて、一九二九年には「ラーマクリシュナの生涯」を、また一九三〇年には「ヴィヴェカーナンダの生涯と普遍的福音」を刊行しています。彼はインドの宗教思想のなかに、西欧の偉大な神秘家たちや、ソクラテス以前の哲学者たちと等質のものを見いだしたのです。彼はとりわけ、彼が絶えず立ち戻つて水を飲んだ深い泉、すなわち「存在」との接触をそこにも見いだしたのです。彼は以前からずっと、個々の存在は大いなる（全体）と分かちがたく結合し、（宇宙的なるもの）に所属しているという感情を抱いてきたし、また本来的に神秘的かつ宗教的な（大洋）感情を抱いてきたうえに、彼はこのような感情をさらに深めたのです。なお彼は一九二七年十二月五日付のフロイト宛ての手紙で、この大洋感情の説明をしています。ラーマクリシュナとヴィヴェカーナンダについての以上二冊の書物によつて、彼はみずからのもつとも奥深い思想を表明することができました。彼が一九三〇年三月一日にL・ヴァン・トリクトに宛てて書いたところでは、「著者は「これらの研究において」おそらく「……」彼のほかのどの書物にもましてみずからの形而上的かつ宗教的思考を披露してみせた」とのことです。

そのあと「魅せられたる魂」を再開したとき、彼がこれらのインド人に近づこうとしてなし遂げたばかりの長旅をも、彼自身の思索の深まりをも、ロマン・ロランは忘れていませんでした。彼は一九二九年十月に仕事を再開したとき、さまざまな場面の下書きを作つて、アネットが生涯の終わりに魅惑から解き放たれる場面に立ち戻つて、こう記しています。

「アネットはいまや二重の生を生きている。」

——第一は彼女がいまなお所屬している、過ぎ行く日々(二)画での生活。

……

——第二に、内面の果てしない広大さ。それは大いなる清明な(闇)のように、谷底から魂たちのもとまで立ちのぼりながら、少しずつ彼女を吸い込んでゆく……

まさにそのとき、彼女の終焉の直前にくる、あの驚くべき知覚消失(臨死体験はその一種)体験者(W・ジェームズ)の幻が現れることとなる。」

哲学者W・ジェームズが『宗教的経験』において表明した観念を、ロマン・ロランはずっと以前から知っていました。彼はそこに自分の見慣れた世界を、(無限)と(幻影)との経験(をふたたび見いだしたのです。彼はこの本のなかで、個々の魂が(存在)に吸い込まれてゆくさまを示した数々の証言を読んだのです。すなわち宗教的恍惚状態のうちに、個々の自我が無際限の(自我)に溶け込んでゆき、自己が(一者)のなかへと没入してゆくというそうした宗教的恍惚状態を表現した(啓示)や(幻)についての証言を読んだのです。そのいずれも(インドの典型的サマーディ(恍惚状態))を想起させる神秘的経験です。W・ジェームズが報告したこれらの経験のひとつが、例の(驚くべき知覚消失体験者の幻)でありまして、この細胞のなかからアネットの臨死の物語が生まれ出てきたのです。

ロマン・ロランが明言したところでは、アネットの死は個々の魂が(宇宙的単一性)と溶け合ったことにほかならず、これはまことの神秘的恍惚状態なのです。この側面を強調した覚え書きが、ほかにもいくつかあります。たとえば一九三〇年六月二十八日のメモにはこうあります。「けっして目標を見失つてはならない。死にさいして魂は裸形となり、もはやなにものをも持たず、ただひとり敷居ぎわに立つ。」こうしてアネットは、彼女を囚われの身にしていた数々の(魅惑)の名残を捨て去ったのち、少しずつ(単一性)のなかへ浸ってゆくのです。「いまなお(魅惑)にすつぱりと捉えられている人たちの目から見ると、彼女は不思議な仕方であらう遠ざかってゆくのである。死の瞬間、魂

はありとあらゆる形から解き放たれ、永遠の（存在）と合体し、そして（暗い影）に浸りながら、みずからがこの（存在）と同一であるという啓示を感じとつてうっとりするのです。

しかし——そしてこれがロマン・ロランの生涯の大きな転機となります——（インドの（夢））のなかで生きていくうちに、彼は大きいなる（幻影）の（魅惑）におのずと身を任せてゆきます。一九二七年以来、彼はロシア革命に下すべき判断についてためらっていました。その暴力のゆえにいったん離れたものの、彼は反感を取り消したのです。彼は少しづつ荷担してゆき、ガンジーにこう問いかけました。「受け容れないことは、どの程度まで理にかなった、また人間の、ことなのでしょうか。」「……」それに、これだけの犠牲すべてのおかげで来たるべき人類の苦悩の総和が減少するだろうと、誠実な良心に照らして請け合えるのでしょうか。それとも、人類は抑制するものなき野蛮にみずからの運命を委ねる危険を冒すのではありますまいか。」「一時期迷ったすえに、彼はついに共産主義体制とロシア革命とを選び取りました。ソ連が西欧を救うものと信じたのです。新世界の到来が苦惱抜きで実現するわけがない、という考えを受け容れたのです。彼はもう革命の暴力と闘わなくなりました。

彼は、インドが彼に想起させたばかりの大洋的宗教思想についての省察と、この新しい立場とを両立させるのに、さしてひどい苦勞を覚えはしませんでした。人間は（存在）の部分であるからには、それなりに言い分を認められてよい、と考えたのです。ラーマクリシュナは（絶対）との同一性を認識したのち、人間たちのほうへ戻ってきて彼らに奉仕したのでした。同様にして「キリスト教の（バクティ）」「感情」にしても、いつなんどきでも恍惚の有頂天から身をもぎ離して、隣人に奉仕することができ「のです。クリストフは「燃える柴」のなかで、ある（神）がやむことなく自分自身と闘うさま、（人類）が自己を形成してゆくさまを見ております。ロマン・ロランは、いわばクリストフのこの教えをあらためて取りあげて、こういう呼びかけを發します。「人間はまだ存在していない。いつかは存在するであろう。」「……」人間のうちに（神）を目覚ましめよ。（存在）を再創造しよう！」そしてロマン・ロラ

ンはきつぱりと告げます。「歴史はもはや単一なるのみ。すなわち、歩みゆくへ一者である。」各人がこのように決心しなくてはならない。すなわち、もし地上にへ神の都市を造り出したければ、人間は人間どうしの闘争に参加しなくてはならない、というのです。おそらくこの行動も《魅惑》のひとつなのですが、本質的なことがよそにあるのを知っているながらも、それでもやはり行動しなくてはならない、というのです。

彼は一九二八年に、熱烈なポリシエヴィストだったマリー・クダシエヴァと恋仲になり、一九三二年にヴィルヌーヴに決定的に住みついた彼女に影響されて態度を急進化させ、しだいにソ連の擁護者になってゆきます。新世界がそこで生まれ出たのだ、これこそは《歴史》の《出来事の歩みそのもの、かのヘアーナンケン「宿命」》なのだ、と確信してのことです。共産主義者と並んで参加するという選択がなされ、その参加はしだいに明瞭の度を加えます。一九三一年六月、彼の「過去への訣別」が断絶の目印となります。

一九三二年四月の論文「ゲートル——死して成れ！」を読むと、ロマン・ロランがそののち政治参加と世界観とをどのように両立させていったかが明瞭にわかります。ゲートルの肖像を描くことで、彼は彼自身について語ったのです。彼は大胆な総合を行って、エンペドクレスとヘラクリトスとレーニンとを結合させます。ドイツ人ゲートルの《Sind und Werden》「死して成れ」は、《永遠の変身metempsychoseの法則》の表現となります。ロマン・ロランは、この法則を当時の歴史に應用して、いまソ連で生まれたのを見ている新世界と、前進中の《宿命》とを、つまり《存在》とを同一視いたします。ゲートルと同じように彼もまた、「それがみずからの歴史的宿命であるからには服従せざるをえず」そして《現在の世界の鉄の輪》を受け容れざるをえないのです。魂は、みずからを運びゆく《必然》を承認するかぎりにおいて自由なままにいられるのであり、現在時から課される限界から擦り抜けるのです。このように考えたときロマン・ロランは、政治行動と《存在》についての観照とを結びつけることに成功したのです。

作者はすでに進行中の作品に、以上の要件と組み込んでいたのです。一九三〇年十二月六日付の長文の覚え書き

には、この書物の大筋が書き留められており、アネットの息子マルクが母親ともども共有に向かつて、すなわち母子の共産主義荷担に向かつて進んでゆくさまが記されています。しかしながらロマン・ロランは、あらゆるイデオロギーの正当化を試みても、どうしてもその気になりきれませんでした。マルクは結局のところ心の均衡を得るところまでは行き着けません。マルクがその点で作家自身のわだかまりを表しているのを、ロマン・ロランは認めています。つまりマルクは、心の底で（気分が落ち着かず、引き裂かれて）いたのです。——「わたしのよう」と、彼は記しています。しかし作者はアネットのためには、彼が一九三三年にゲーテに仮託することになる態度を予定したのでした。

「彼女は、自由な、魅惑から解放された魂の、いや果ての境地に到達するであろう。すなわち、自己断念の境地である。」「……」この境地に達した人々は、宇宙の大いなる法則にじかに接して、それらの法則のなかに溶け込む。潮のリズム、もろもろの民族および社会の潮の干満を理解し、それを受け入れ、うしろに取り残されることなく、大きなうねりに参与する。みずからの自由で明瞭な判断をなにとつ捨て去つたりはしない。ただ、こう言う。——
「Fiat voluntas!……」
「ニココロノママニナサレヨ!……」
そして、もろもろの世界を導くこの意志に同化しようとする。暴力の法則とそこに内在する物質主義とは、かつて氷により、また火によって地球を形作つたあの物理法則のひとつに似通っている。それは善悪の彼岸にある。物理法則に従うのと同じようにこれに順応しなくてはならず、そのさい、そこから生ずる荒廃をきたす威力の回避に努めて、これを是認したり、いたずらに非難したりはせず、ただそれがもたらす雪崩や洪水を利用するがよい。「……」自然界に生ずるこれらの「革命」のただなかにあつて、魂は自由なままであり、怒りを発することはない（哀れみは覚えようともしない）。

ロマン・ロランはこうしてきつぱりと立場を定めます。そして彼の長編小説の最後の二巻「ひとつの世界の死」と「出産」（一九三三年）は、あの政治参加の刻印を帯びていますが、そこには神秘的次元への参加の刻印も押されています。

す。アネットは彼女の力を（へ一者）の夢のなかから）汲み出すのです。「（一者）は行為である。へ一者）は前進してゆく。」彼女は（歴史）の大波と一体化します。

ロマン・ロランは、これが最後の幻影、つまり（魅惑）にすぎないのを知りつくしています。それというのも、彼が一九三三年三月七日にロジエ・ベシエールに書いているとおり、この参加によって（数百万の人々の行動という大海原に身を浸し直すことで自己を更新し、かつ成就する）ことが可能だとしても、つぎのことを忘れてはならないからです。「これは最終段階ではないでしょう。社会的闘争の向こう岸があるのです。どこまで行っても向こう岸があるのです！ 生の秘密を知りつくした人たちにとっては、まさにそれこそ生の尽きせぬ豊かさ喜びとにはかなりません。」

まさしくこの（秘密）のおかげで、思索は自由なままでもいられ、そして（現在の運命の鉄の輪の外へ）脱出できるのではないのでしょうか。ロマン・ロランがゲートを描いた肖像画に立ち戻らなくてはなりません。「それというのも、まるきり別のゲートがいるからである！ 彼は（絶えず全体を渴望する）人であり、（自分自身が全体）をなす人なのである。「……」したがって、彼が現在のために社会的ないしは政治的行動（または立場）を選択しても、歴史上のつぎの時刻にかんしてであれ、別の人物にかんしてであれ、まるきり別の選択をもくろむことが皆無となるわけではない。」アネットがアーシャともども（その新しい——強力な——社会的な鎖に）魅惑されたりはしないのと同様、ロマン・ロランもまた（魅惑）に身を任せたりはしません。彼はロジエ・ベシエール宛てに書いたとおり（へ精神）の奥深い、捉えがたい自由）を保持しようとしています。すくなくとも、保持したいと希望するのです。

ロマン・ロランは、一九三〇年代をつうじて彼の選択を堅持しました。西欧がその魂を失ったのに、ソ連では新しい人類が築かれつつあると評価したのです。彼は生のある側に身を置きました。まずイタリア、ついでドイツにファシズムが出現するや、彼はソ連擁護の姿勢をいっそう強めました。彼の行動のすべても、彼の著作も、二重の関心事

の刻印を帯びています。それはファシズムと戦うこと、そしてソ連を擁護することです。そのとき彼は優れた味方に囲まれていました。すなわち、バルビュス、ブロック、ジード、ゲーノ、マルローが、同じ闘いを進めていたからです。

一九三五年——それまでは健康が許さなかつたので彼はあまり旅行できなかつたのですが——ジードより一年早く、ゴリキーに招待されてとうとうソ連に赴くことができました。ソ連国内はほとんど旅行できず、モスクワのゴリキーの家に滞在するだけで我慢しなくてはなりませんでした。公的訪問者だつた彼は、体制のお歴々——スターリン、ヤゴダ、ブハーリン、ディミトロフ——と話しあつたり、彼らと重要問題を論じたりする機会がありました。大勢の來客と接して、ソヴェトの現実を発見することもできました。滞在中につけていた「日記」や帰国後に書いた覚え書きのなかで、彼は齒に衣を着せぬ総決算を作成しました。しかし、無条件でソ連を擁護する決心をしていたものから、留保事項は黙して語らず、公表したのは贊辞を連ねた数ページに過ぎませんでした。

ロマン・ロランは、彼の選択からくる困難を引き受けました。みずからの参加を否認したくなかつたのです。一九三五年四月二十日に、ジャン・ポール・サンソンに宛ててこう書いています。「わたしはソ連の目指す目標は正しいと思いますし、ソ連がそこに到達すること——あるいはもつと控えめに言うなら——そこに近づくことが人類にとつて必要だと思っています。しかしソ連の行動家たちが講じる手段については、わたしは保証人にはなりません。ただ、このことだけは知っています。行動を起こせば絶えず恐ろしい問題と向かい合うこととなるもので、そのさいに禁じられている立場はただひとつ、ハムレットの立場——頭蓋骨を手にして夢想する男の立場なのです。行動の「見地からすると」正しいのはフォアティンブラスだということはあまりにも明瞭です。せめて彼の進む道が眞の目標に向かつていさえすればよいのですが！ わたしにはフォアティンブラスはいっこう羨ましくありません。私の心の奥底には、実存の悲劇への「Grauen」[恐怖]が、それとも「Mitleid」[同情]がありあまるほどあります。——しかし、

間違っているのはわたしで、フォースティンプラスが正しいのです。」

その後の何年か、フォースティンプラスがどうであろうと、ロマン・ロランは自問を続けました。一九三六年六月のゴリキーの死、一九三六年八月、ついで一九三七年一月、さらに一九三八年三月のモスクワ裁判は、彼を考え込ませました。ジードやゲーノがスターリン体制を拒否して非難したのと違って、ロマン・ロランは公的にはなにも語りませんでした。しかし、彼の幻影は消えたのです。一九三七年—一九三八年に書かれた『ロベスピエール』は、ロシア革命が辿った流れを遠回しに裁断したものと、一種の良心の検討とも見てよいでしょう。ロマン・ロランが以前に「必然」とか「宿命」とか呼んでいたものが、ここでは「否応なしの成り行き」となっています。しかし、その成り行きは人々をどこへ連れてゆくのでしょうか。「否応なしの成り行き」の言いなりだと、陰謀が永遠に真実に打ち勝ち、正義は虚偽となり、もつとも下劣な情念が人類の神聖な利益と取って代わるからには、そこから出ないでじつとしている」のはごめんだと、ロベスピエールは拒絶します。ロベスピエールはこういうわけで、自分に押し付けられた宿命の道具と化して、彼自身の理想を裏切るように追い込まれた限りにおいて、ひとりの敗者だったのです。

そのときロマン・ロランとしても、自分がマルクスレーニン主義史観から見ただけの「歴史」の流れと一体化することをあまりに安易に承知したがために道に迷ってしまった、と認めているのでありましょうか。ロマン・ロランは「ロベスピエール」を書くことで、「思索」と「行動」とのあいだの不断の論争をあらためて取り上げたのです。「人生か……おれはこいつをどうしてしまったのか……」とロベスピエールは叫びます。「たわごとだ！ おれはこう言うべきなんだ。人生はおれをどうしてしまったんだ。なぜって、おれはこんなことを願ったりはしなかったんだから。」ロベスピエールは、自分がその道具となつて奉仕した「この勢い」の犠牲となつたあげく、それが下す否応なしの命令を甘受したことを認めます。「この命令は、おれたちの心の奥底に書き込まれているわけではない。外側からおれたちに押しつけられたのだ。来る日も来る日も、出来事という蛇どもの絡み合いのなかから、その命令を引っ張り

出さなくてはならない「……」。まさに仮借ない宿命の輪のひとつひとつが、たがいに引つ張り合っているんだ。そこから逃れるわけにはいかないものの、この宿命がおれたちをどんなものにしてしまったか、それがおれたちに無理にやらせたのがなにごとだったかを見るとだな、おれたちはふいに怖くなって、明日はそいつがおれたちになにごとを要求するものやらと自問するのだ。」ここで発言しているのはだれでしょうか。ロベスピエールでしょうか、それともロマン・ロランでしょうか。

じつを言うとロマン・ロランは、かつての問いにふたたび出会ったのです。すなわちへ歴史への上げ潮に巻き込まれた個々の自己の自由には、いったいどれだけの分け前があるのでしょうか。自由とはへことの勢いへを受け入れながら明晰を保つだけのことででしょうか。それでは安易なアリバイではありませんか。それはまた、拒否でもあり、闘いでもあるのではないのでしょうか。

一九三九年八月に独ソ不可侵条約が調印されたとき、彼の目から決定的に鱗が落ちました。それまでまだいくばくかの幻想を抱きつづけていたにせよ、それも消え去りました。自分がソ連に味方して参加したとき、どれほど欺かれていたかを悟ったのです。自分が自分自身に忠実でなかったことがわかったのです。

それ以後は、控えめながら断固として、彼はフランス共産党にたいして距離を置きました。彼は縁を切り、そしてへ日記へのなかでスターリンとその政策とを激しく非難しました。

一九三八年以来、彼はスイスを去ってヴェズレーに住みつきました。齢七十二歳となったこの人は、「わが人生、わが信念、わが不屈の信条の実質をなす力強い宇宙的夢想に立ち戻るにあたり」本来の彼自身に戻ります。とくに一九三九年以後はそうですし、一九四〇年六月にフランスが喫した敗北のちはなおさらのことでした。

ロマン・ロランは、自分が立っている状況を明確にし、さき一九二四年にしたためた「周航」に、そのときになつて何ページかをつけ加え、それまで生きてきたばかりの数年間について情け容赦のない総決算を作成しました。彼

は（もはや自分が正しいと認めようとは試みず）自分が（実存の悲劇的なヘマーヤー「幻」）によって、うかうか
と（魅惑）されてしまったことを認めています。早くも一九二九年に闘いに巻き込まれたさいに、自分が（精神によ
つて戦場を把握）できなかったことを残念がっています。彼は（行動）から引き下がります。「わたしについてい
え、これでおしまいだ！」「……」わが人生の大いなる（幻影）の最終局面は幕を閉じた。「……」かつてわたし
がその一員だった蟻塚の熱病じみた大騒ぎから、わたしはどうとう離れ去る。」

彼は自分の人生の終末にさしかかったのを知っているのです。彼は（この宇宙的な（夢）のただなかに帰る）こと
しか求めています。そしてその夢こそは（現実のなかでもっとも現実のもの）なのでありまして、彼は（その厭
かな安らぎを前もって味わう）ことしか求めないのです。

彼はもとの（観照家）に戻って、みずからの本性を取り戻します。彼の友人のアルフォンス・ド・シャトーブリヤ
ンは、その当時政治行動のなかへ、それも彼には認められない方向に向かつて、みすみす引きずり込まれていました。
ロマン・ロランは一九四二年一月十二日にこの友人に書き送っています。「きみの真の天職は——それはほくたちに
とつての唯一の真の義務だし、それに、精神による刻印を受けてこれに仕えるべき、ほくたち精神の人にとつての使
命なのだ——意識を集中して知的な（心と精神の——魂全体の）創造にいそしむべき、ほくたちの任務なのだ。その
ことよつてのみ、ほくたちがいま生き、やがて死に至る日々を立ち超えて、遠近を問わず人々に働きかけるように、
ほくたちは呼び求められているのだ。ほかのいかなる任務も不完全だし、——たいていのばあい誤っているし、（そ
れというのが、ほかの任務はほくたちの額に刻まれている印に應えるものではないから）——そのうえ罪でさえある。
二年このかた、ほくはその点について、じつくりとほく個人としての反省をしてきた。」

ヴェズレーでの歳月は、たんに良心の検討と告白との時期だったわけではなく、それはまた要点の繰り返しと掘り
下げの時期でもあったのです。

（大いなる試練の時期には）（自宅に閉じ込められたまま）彼はみずからの過去に立ち戻りました。一九二四年—一九二五年に書いた原稿を集めて、彼は「内面の旅路」をまとめました。へ日記」にもとづきながら一九〇〇年までの回想記をしたため、彼の生涯のもろもろの段階を辿つたのです。それからベートーヴェンについての瞑想を再開して「未完のカテドラル」三巻を書きました。この音楽は彼の全生涯をつうじて付き添つてきたのですが、彼はそのなかにあらためて兄弟のような魂を見いだします。それは、闘いに闘いを重ねつつ、自分の内面において反対物を調和させようと努めたすえに、とうとう晴朗さに達した人です。「ピアノ・ソナタ、ハ短調、作品番号一一」のうちに、彼はベートーヴェンの魂のもつとも純粹な表現を見て取りました。存在を掘り起こす闘いがアレグロの楽章に表現され、それに続いて晴朗なアリエッタが来ます。「ここでは精神が、まるでテラスから飛び出すように、苦もなく、危なげなく飛翔する」のです。ロマン・ロランの考えでは、「このアリエッタは「……」ベートーヴェンの口から発した最高のことばのひとつである。そこでの彼は、まことに至上の静けさに包まれた生の支配者である。ほかのどこでも、へ歎喜」の主題においてさえ、彼はこの晴朗さを実現してはいない。しかもその力強さは、仏陀のほとんど不動の微笑のかけに隠れている。」このソナタの末尾は、（光明の穏やかな確かさ）を、（充実した安らぎ）を表現しているのです。ロマン・ロランは楽しげに、（最後の諸作品の解脱ぶり）を示しています。「魂はみずからの（神）と二人きりになつており、そして（神）はもろもろのかりそめの形とともに戯れつつ（存在）の中心に座を占めている。」この数語を記したとき、彼は自分のことを考えていたのでしようか。

苦もなく見て取れることですが、「真ナルガユエニワレ信ズ」以来のロマン・ロランの思想、「ジャン・クリストフ」および「魅せられたる魂」に表現された思想が、ここにも脈々と続いているのです。

こうして戦争のために家に閉じこもつたまま、健康は不安定だし、病氣もあつたのに、ロマン・ロランは彼の内面の探究を続けました。身近にいた人たち——なかでも、ジャンヌ・モルティエがティヤール・ド・シャルダンの話や、

宗教界の革新のことを彼に話しましたし、ミシエル・ド・バイユレ神父を始めとするドミニコ会士とか、ヴェズレーの友だちのビヨン博士とかがいました——のおかげで、彼は若返ったカトリシズムを発見しました。マリーのおかげで再会したクロードルからも切願されたし、彼自身もカトリシズムに接近しようと企てたものの、それにもかかわらず彼は「敷居ぎわに留まった」のです。彼はそれでも「神」について、また「存在」についての自分の考え方を反省せずにはいられませんでした。

彼はかつてのベギーとの関係を思い出しなくなつて、ベギー論を書き始めましたが、しだいに気乗りがして主題を拡大しました。彼は、ベギーの形而上学を、「その光源をなす中心観念」を発見したいと思ひながら、この人物の神秘のなかへといっそう深く入ろうとしたのです。それは同時に、彼自身のために進めた省察でもありました。人格神の实在こそ認めませんでした。彼は個々の自己と宇宙的「大我」との関係についての自分の考え方に修正を加えました。一九四三年一月—二月の病氣中、彼は「汎神論の精神的貧困」を確認して、自分が「実存」の源泉」に近づいたのを感じています。

一九四四年八月—十月に書かれた最後の作品「福音書」についての対話」が示しているとおり、キリストの神性は認めなかったものの、ベギー、ベルジャーエフなど、自由を論じた宗教的形而上学者たちと接するうちに、彼は自分の新しい考え方を明確にしておく気になりました。彼は一九四四年十二月にこう書いています。

「神」と同質なる「自由」。大いなる、神秘中の神秘。恒久的「創造」の次元においては、すべてが——善も悪も——「自由」のなかで行われる。人はだれしも「自由」のうちにあつて「創造」に参与し、そして「創造」は時の終末まで継続する。

また他方、キリストは時の終末まで臨終のうちにある。彼の犠牲は続いている。

このようにして、世界を創造する「神」の恒久的行為と、世界を救うためにみずからを犠牲に捧げる「神」の恒久

的行為とのあいだには、並行関係が存する。」

彼はこのようにして、生涯のさまざまな時期に、ときおり波の動きにつれて揺り動かされもしましたし、数々の矛盾もありましたし、彼みずから〈*corsi e ricorsi*「行きつ戻りつ」〉と称したことどももありましたが、それでもこの複合的な人物は、ひとつの調和に至りついたのであります。それこそはロマン・ロランが、明晰に、そして意志的に、生涯をつうじてめざしたことでした。おそらく彼は、苦勞を惜しむことなく社会的闘争に加わったとき、それがじつは自分の真の本性ではないのを知っていたのです。しかし、それもまた彼自身の一部分でした。一月三十一日に、彼はヘルマン・ヘッセにこう書き送りました。「わたしが生きたのは、わたしの生の夢ではなくて、その宿命でした。そして、宿駅でひと休みしようと思うたびに、この宿命が絶えず新しい闘いをわたしに強制したのです。一度として休息できませんでした。しかし、しまいに休息が得られるでしょう！ その代価を払ったからです。」

ヴェズレーでは、彼は休息をかちえただけでなく、さらにこれまでになく省察の時を得たのです。最晩年になって〈あるがまま〉の姿になったのです。つぎのことを知って、人々は驚くでしょうか。一九四四年クリスマス夜の妻のマリーと、義母のアデル・キュウイリエとが、サント＝マドレーヌ大聖堂での深夜ミサに列席しているあいだ、ロマン・ロランは友人のリュシヤンおよびヴィヴィヤヌ・ブイイエに向かってベートルヴェンの話をしていました。彼はだしぬけに立ち上がり、リュシヤンの肩に手を載せてこう言ったのです。「リュシヤン、手を貸してくださいませえ……」わたしたちのミサを挙げに行こう！」そして彼は「ピアノ・ソナタ、ハ短調、作品番号一一」を弾き始めました。リュシヤン・ブイイエがこのすばらしいひとときについて書き残した物語は感動的です。ロマン・ロランはこれを最後に、〈涸れることのない力と信仰との泉〉にやってきて水を飲んだのです。彼はベートルヴェンの魂と心を通い合わせて〈充実した安らぎ〉を見いだしたのです。

〔*Fritia comedia*〕（〈フィニタ・コメディア「喜劇は終わりぬ」〉）と——「未完のカテドラル」第三巻の表題



デュシャトレ氏夫妻

を借り、ベートーヴェンが亡くなるすこしまえに口にした最期のことを念頭に浮かべて——そう言ってもよいでしょう。ところで、ロマン・ロランがこの語句に加えた注釈は予感に溢れたものでした。「役割は演じ終えた。——数々の幻影、空しい情念、苦々しい落胆、夢、架空の創造の演ずる役割は……。彼はこうしたことどもを、明るい、穏やかな、そして悟りきったまなざしで見定めていた……。」

数日後、ロマン・ロランは亡くなりました。

デュシャトレ (プレスト大学教授・フランス)

村上光彦 (成蹊大学教授)

ロマン・ロランとフランス革命劇

河野健 二

ロマン・ロランはフランス革命について、八つの戯曲を書いています。まず、それらを製作年代順、タイトル、戯曲が扱っている年次の順でリスト・アップしておきます。

ロマン・ロランの革命劇

制作年	対象年
(1) 一八九八	【狼】 Les Loups 一七九三
(2) 一八九九	【理性の勝利】 Le Triomphe de la Raion 一七九三
(3) 一九〇一	【ダントン】 Danton 一七九四
(4) 一九〇二	【七月十四日】 Le 14 juillet 一七八九
(5) 一九二五	【愛と死の戯れ】 Le Jeu d'Amour et de la Mort 一七九四
(6) 一九二六	【花の復活祭】 Pâques Fleuries 一七七四
(7) 一九二八	【獅子座の流星群】 Les Léonides 一七九七
(8) 一九三九	【ロベスピエール】 Robespierre 一七九四

ロマン・ロランはあるところで「芸術の目的は夢ではなくて生命である。行動は行動のスペクタクル（見せ物）から出現するはずだ」と言っています。つまり、演劇を通して人間の行動の意味を読み取ってもらい、それが行動への呼びかけであることを求めるのです。まさに、ロランのフランス革命劇は、革命の様々な局面を劇にしていますが、劇を通じて、戦った人、敗北した人、利益を得た人、そのような人びとの姿を示し、そのことによって人間はいかなる存在なのか、何をなすべきか、何を汲みとるべきかを示そうとしています。

第一番目の「狼」は最初に書かれた革命戯曲です。この「狼」（一八九八年）は、ドレフェス事件の時期に書かれたものです。ドレフェスという軍人がフランスの陸軍参謀本部にいて、彼がユダヤ人ということによってドイツのスパイだとされ、フランスの軍事機密をドイツに渡しているという疑いをかけられ、終身刑に処せられたことに端を発する事件ですが、フランス社会を二分する政治的事件となり約十年間続きます。

このドレフェス事件に刺激を受けて書かれた深刻な話です。「狼」の対象年は一七九三年。フランス革命は八九年に始まりますが、九二年、九三年頃というのは過激さが一段と進んだ年であり、そのとき、フランス軍隊は市民の義勇兵等が中心となって、従来のフランス軍隊と一緒にあってドイツに攻め込み、ライン河畔のマインツという町を占領します。ここにフランスの司令官が置かれる。ドイツではフランス軍が来たということで、フランス革命を支持する運動が起る。これがドイツのジャコバン派の運動です。が、やがてつぶされてしまいます。

舞台はその司令部で、三、四人の司令官が一緒に住んでいる。ひとりにはフランスの貴族出身、もうひとりにはジャコバン、さらにもうひとりには科学者で革命に参加し、出征して司令官となっている人です。

この現地で三人の間に争いが生じる。貴族に対してジャコバンが「あいつはドイツと通じている」と言い出す。そこで科学者は「ドイツと通じているというスパイ説は間違いだ。そうでないことを私は現に見た」と証言する。ところがその証言をした科学者が逆に疑われて、結局フランス国内のジャコバン派が支配する中央委員会に問題が移され

ることになります。そうすると科学者の運命はきまつたも同様です。彼はスパイと疑われた人間を救おうとして逆にスパイにされてしまうという結末です。

この劇に示されていることはドレフュス事件のスパイ問題、祖国愛と人間の真実、ドイツとフランスの関係、これらの葛藤が描かれている。革命期の激動を舞台にしてドレフュス事件を背景として書かれていて大変迫力があります。

「レ・ルウ」というのは複数の狼という意味です。人は相手に対して互いに攻撃する狼として生きる。そういうペシミズムが表現されています。

一八九九年という世紀末に作られた「理性の勝利」は、理性の勝利という表題にもかかわらず、その内容として描かれているのは、むしろ理性の敗北です。

フランス革命では九二年から九三年にかけてジロンド派とジャコバン派の対立がある。ジロンド派は合理派で、理性を尊重し社会の進歩を進めるべきだとするエリートの集りです。他方ジャコバン派は最初は緩やかな組織であったが、だんだん急進的になり暴力肯定的となり、最後は少数独裁、力ずくの政治を実行します。

結局、ジロンド派はジャコバン派に負け、理性は勝利するどころか、敗北の運命を迎えます。つまり、ジロンド派は、一斉逮捕となって、議会から追放され、逮捕令によって追われます。その状況が描かれています。

つぎは「ダントン」です。ジロンド派と一番近いジャコバン派にダントンがいます。ダントンはフランス革命の英雄の一人。フランス人の中ではダントン晶屑の人が多く、彼は教養ある人物というより大胆不敵で、アジ演説がうまく、時と場合によっては妥協も辞さない政治家です。

ロマン・ロランは「ダントン」を肯定的に描いている。ジロンド派が追放されてのち、ダントンは孤立し、ロベスピエールとはげしく対立することになります。そして、ロベスピエールの潔癖（けつべき）さと猜疑心の結果、彼はダントンを処刑にふみ切ることになります。ポーランドのワイダ監督の映画「ダントン」を思い出します。

そのつぎの「七月十四日」（一九〇二年）は革命の始まりのバステューユの牢獄内の話です。

七月十四日はどのようにして始まったかを扱ったものですが、そのなかで牢獄を守った側の人間の口を借りて民衆というのは時としてひどく野蛮になるものだ。民衆のエネルギーは歴史の遠い昔から続くもので、人間にとつて避けがたいものだが、無条件に肯定できるものではないという一種、覚めた目で民衆の動きを見ている点が印象的です。

つぎは「愛と死の戯れ」（一九二五年）、日本語訳の戯れというのは、遊び戯れるという意味がありますが、ジューという原語は賭けという意味と、せめぎあい、愛が勝つか、死が勝つかというぎりぎりの意味が込められています。フランス革命を扱った戯曲のなかでロランが一番力を入れたものと思われ、今読んでも面白いものです。

主人公はジェローム・ド・クールヴォワジエ。フランス革命のなかのコンドルセという人物。彼は貴族で学者、経済学者であつて数学者で、しかも政治に関わつた人ですが、そのコンドルセを大体モデルにしているが、もうひとりにはラボワジエという有名な化学者で、物の燃焼や、動物の呼吸においてはたす酸素の役割を発見し、液体、気体、固体の区別を確立し、また熱量の測定を初めてした人で、近代化学の基礎を樹立した人ですが、その人物をも念頭においています。

フランス革命のとき、ラボワジエの職業は徴税請負人というものでした。父から受け継いだものです。それはどういふ仕事かというと、税金は政府が直接とるといふのではなく、税金を請負わす、つまり間接税の徴集を引き受ける職業の人間がいたのでした。政府から安く引受け、国民から高く消費税を取るから評判は大変悪く、革命が急進化した時点で、容赦なく殺されてしまいます。ラボワジエを有罪とした検察官が「共和国に学者はいらない」と述べたことは有名です。

ロマン・ロランはこの二人を念頭に置いて作品に登場させています。

コンドルセは一七九一年に革命議会に出て公教育の体系を提出する。ジロンド派が追放されたとき、彼はジロンド

派と見られ、逮捕令が出され、逃げた先のかくれ家で自殺したと言われています。彼は単なる数学者ではなく、科学アカデミーの書記という仕事もしていて、社会の合理化を革命前から考えていた人物です。「黒人や女性の権利」を主張し、国家による統制に反対して自由化を推進しました。しかし、国王の存在には反対ではなかったのです。

ところが革命では、いろいろな事件が起こり、国王がひそかに逃亡するというようなことがあり、外国との通謀も明らかになり、彼は君主政に疑問を持つようになります。一七九二年末から九三年にかけて、「国王裁判」つまり逃亡をはかり、外国と通じていた国王をどう処置するかということ、国会議員の一人一人が壇上上がり「国王は有罪」あるいは「有罪であるが執行猶予付き」「議会が国王の裁判をするわけにはいかない」とか様々な立場が表明されました。結論的には、ジャコバン派の主張した「国王を直ちに処刑せよ」ということになります。ジロンド派は国王の有罪は認めますが、執行猶予にすることを主張して敗北することになります。このときコンドルセは、死刑制度そのものへの反対を唱えます。国王だけでなく、人間を死刑にするような残酷なことは認められない。議会は先ず、死刑を廃止するということを決めて、その後国王をどうするかを裁判すべきだと主張して完全に孤立してしまふ。彼の男女同権論もまったく受け入れられませんでした。

コンドルセはジロンド派ではなかった。彼は党派に組しないことを方針としていました。しかしジロンド派とみなされることを拒否しなかった。私をジロンド派とみて追放するなら止むをえない。それには相手方にも理由があるとする態度をとります。そして逮捕令を受けることになりました。

以上のことを考えますと、ロマン・ロランがコンドルセに親近感を持ったことは理解されます。ドラマはジェロームという知識人、科学者の遭遇した苦悩、妻のソフィーとその若い恋人を助けようとして逃亡をすすめるジェローム、夫への愛に生きようとするソフィーなどのせつば詰まった葛藤が描かれています。知識人は政治闘争の中では勝利しない。敗北が避けられない。そういうスペクタクルです。

「花の復活祭」(一九二六年)は対象年は一七七四年で、一番古い時期、革命十五年前の状況を扱っています。

劇では貴族が舞台上に登場、貴族の兄弟が互いに財産の相続を争う。そこにジャン・ジャック・ルソーが登場します。彼はまだ生きてゐるわけで、最晩年です。「人間はエゴイストでエゴの塊だ」とぶつぶつ呟きながらどことなく帰ってゆきます。「花の復活祭」はフランス革命劇の本論に対する序論という意味があります。

つぎは一九二八年の「獅子座の流星群」で対象年は一八九七年です。革命は一七九九年に終わりますので最後のときです。舞台はジュラ山脈の山荘で、かつての貴族とジャコバン派で活躍していた者が、両者とも失意の気持ちで出会うという設定です。ジュラ山脈の向こうにナポレオンの軍隊がオーストリアを目指して進んでいる。フランス革命が事実上終つて、貴族も、ジャコバンも何も得られなかった。残つたのは何か。ナポレオンの軍隊である。しかし、それを肯定的に書いているのではなく、貴族はナポレオンが嫌い、ジャコバンもナポレオンのクーデターに反対でした。この戯曲はその軍隊を情況的に描いているだけです。

フランス革命の残したものは何か。貴族制度はフランス国内では打倒されたが、ヨーロッパの全域、オーストリアでもドイツでもそれは厳然と生き延びました。

結局、フランス革命はヨーロッパでは存在する、将来も存在するであろう制度がフランスという国の中で激しく対立しただけのことでした。フランスでこの先何かがあるとすれば、それはヨーロッパでの軍事的栄光ということだということが暗示されています。この作品は、フランス革命が終つたエピソードのなかで、何が残つたかを考えた物淋しい感じを誘うものです。

最後に「ロベスピエール」がありますが、作品として成功しているとは思いません。なぜか。この作品が書かれた一九三〇年代はフランスでは人民戦線、あるいはファシズム反対という声が強くなってきた時代です。フランス革命を研究している人の中でも、フランス革命はこれまではジロンド派、ダントーンぐらいまでを評価してきました。しか

し、やはりロベスピエールがいなければ、あそこまで徹底しなかった。ジャコバンの力がデモクラシーを守ったのではないか。そういう考えが出てきました。例えばダントンびいきのオーラルという代表的な学者がいましたが、その学説に反対したマティエという人はロベスピエール派で、ロベスピエールこそは現代のロシアのレーニンなどの革命派に相当するのだと説いて大きな影響をあたえました。

これらの風潮とデモクラシーを守り人民戦線をつくるという運動が結びついて、ロランもまた「ロベスピエール」という戯曲を書いたのだと思います。

しかし、これは冒険でした。ロランがこれまで考えてきたジロンド派とかコンドルセ、そういうところの合理主義とか科学主義、歴史の進歩観、あるいはリバリズムを打ち倒したのがジャコバン派であり、その中心人物がロベスピエールでした。

このロベスピエールを主人公に戯曲を書くということは非常に難しいことです。ロランは必ずしもロベスピエール賛美ではない。この作品はロベスピエールがどうして失脚することになるのか。反対派がどのように策謀をめぐらせたかに力点をおいているように見えます。ロランはロベスピエールを「革命の最大の人物」としながらも、その虚栄心や同僚への猜疑心などを没落の原因として指摘しています。結局「ロベスピエール」は明確な印象をあたえずに終わっています。

ロランのフランス革命劇のなかで多い対象年は一七九三年〜九四年で、国王が処刑されたり、ジロンド派が追放され、フランス革命をめぐる列強のイギリス、オランダ、ドイツの力関係が緊迫した時代です。「ロベスピエール」を描くことでロランは自分の生きた時代に革命劇をつなこうとする気持ちがあつたのかもしれませんが。しかし私の印象では「愛と死の戯れ」「狼」「ダントン」などのほうが含蓄が深い、そういう感じですか。

(京都市生涯学習総合センター所長・京都大学名誉教授)

私の科学とゲーテ

岡田節人

文学・芸術と科学とは全く隔絶した世界のものととられがちである。それも当然で、前者は心と情の領域にかかわり、後者は理の領域にある。しかし、両者とも人間という存在が創造し、はぐくんでいることはまぎれもない事実である。表面的にはいかに別世界にあつても、それらを営む人間にとつては、まぎれもなく交流しているのである。

ロマン・ロランの作品が、私の青少年の時期においていかばかりの感銘を与えたかは、今も私のレトロスペクトのなかに明らかに残っている。それが私が科学というような道へなとなく入ってきたことに、いくばくかの影響をもつたことは否定しようもない。しかし、これは「個人」の歴史のおはなしに過ぎない。公に語り、書くような類のことでない。残念なことに、私はロマン・ロランの作品のなかに科学との交流を指摘できるような事項を発見していないし、また、ロマン・ロランが科学者と交流があつたかどうかとも知らない。職業的科学家として、公に述べることは、なんらかの具体的な事実が必要で、個人の思い出だけでは無責任だろう。

ゲーテとなると、私個人の思い出ではなく、「私の科学」に今に至るまで深くつきまとつてゐる。ゲーテは生物学者でもあるのだから、当たり前のこと、といえそうだが、実は、交流はそう簡単ではない。むしろ、生物学者ゲーテに閉じこめられた範囲をはるかに越えての交流だ、とえらそうにいえる。

「ゲーテから遺伝子へ」というのは、私の大いに気に入つてゐる、講演や書きもののタイトルの一つなのだが、こ

れは誠に矛盾にみちたものである。というのも、ゲーテの生物学の理念は、いわば全体的有機説なのであって、一簡単に比喩すると、一本一本の木をどれ程詳しく調べて森のなんたるやはわからぬ、ということである—そこには遺伝子という考えなど全く入り込む余地はない。遺伝子は生物の究極の個であり、それに基づいた生きものの理解こそが近代生物学の確固たる主潮なのだから。にも拘らず、宇宙の如く巨大なゲーテは、今日の生命・生物学のフロントを端的に語ってさえている。

ゲーテが錬金術に、一方ならぬ関心をもっていたことはよく知られている。その関心はガラス器のなかで、人造人間をつくる、「ファウスト」第二部の場面で結実されているように私には思えるのだ。

なにも、現在の生命・生物科学が人間はおろか、ミミズの一匹をつくりだす、なんて目標を掲げているわけでもなし、またそんなことができるわけでもない。しかし、ゲーテがここで「操作」と呼んで人造人間づくりを語っているプロセスのスピリット（いうまでもないがプロセスそのものではない）は、現在、人呼んでバイオテクノロジーと称するものをよく象徴している。

逆に、バイオテクノロジーなるものへの関心が、あまりにも個々の技術面に走り、そのスピリットの何たるかの本質の考究を、全く怠っていること今日、ゲーテまで遡ってその魂をさぐることは有意義であろう。

ゲーテと「私の科学」との交流は、これに止らない。もし、御関心のある方がおいでになるなら、近刊の拙著「生命体の科学—テクノロジーと文化」（人文書院）のなかの「ゲーテから遺伝子まで」と冠した一章を参考頂きたい。

（生命誌研究館館長・京都大学名誉教授）

ロマン・ロランとドイツ音楽

岡田 暁 生

初めに言い訳じみたことを申しておきますと、私はロマン・ロランの「小説の」読者としてはまったくの落第生であります。そもそも私が高校の一年だった時の夏休みの読書課題にヘジャン・クリストフが出たのですが、ろくに読みもしないで、参考書にのっている粗筋だけを見て感想文を書いてしまいました。そして正直申し上げます、私は現在に至るまで、ロランの作品の熱狂的な読者であったことは一度もありません。ただ有難いことに、皆さんもご存じでしょうが、ロランはもともと小説や芝居を書き始める前は、バロック時代のオペラ研究で博士号までとった音楽学者でありました。そして音楽学者としてスタートしたということは、後のロランの創作活動すべての出発点になっていると言つてよろしいでしょう。従つて、小説家としてのロランではなく、音楽学者としてのロランについてであれば、恐らく私にも何か新しいことが指摘できるのではないかと考えて、本日の講演をお引受けした次第であります。

1. ロマン・ロランと「ドイツ」音楽

さて、「音楽学者としてのロラン」を考えると、絶対に見落としてはいけない前提と言いますか、予備知識があります。それは十九世紀において、ドイツ音楽と、フランス音楽とが、どれだけ異質なものであったかという問題で

あります。そもそもドイツとフランスは、政治的にも仲がよかつたためしがないわけですが、音楽的にもドイツ音楽とフランス音楽とは水と油であつて、絶えずいがみあいを繰り返してまいりました。

まずドイツの側を見ますと、ドイツ人が音楽の中に求めたのは、哲学や文学にも肩を並べるような思想性であり、深い内面性であり、巨大な構築力でした。そしてドイツ人のこうした音楽観を象徴するのが、交響曲や弦楽四重奏やピアノ・ソナタといった、ベートーヴェンに代表されるような純粋器楽曲のジャンルであつたわけです。「交響曲」というとクラシック音楽の代表的なジャンルですが、決してヨーロッパの全ての国で交響曲が作られていたわけではありません。例えばイタリアではまったく交響曲は作られませんでしたし、フランスでも事情は大同小異でした。要するに交響曲とか弦楽四重奏とかピアノ・ソナタと言うのは、専ら「ドイツの」音楽ジャンルだったので。そしてドイツ人達がこの交響曲やピアノ・ソナタといったジャンルに対して抱いている誇りというものは大変なものでして、例えば彼らはベートーヴェンの「第九交響曲」やマーラーの「千人の交響曲」のことをしばしば、誇らしげに「世界観音楽」とか「哲学音楽」とか「形而上音楽」といった風に形容しますが、こんなところにも彼らの音楽の考え方がはつきり表れております。要するにドイツ人にとって音楽は「ただの娯楽ではなく、哲学であり思想なんだ」というわけです。

では次にフランスの側を見ますと、彼らの音楽観はドイツ人とはまったく対照的でした。「音楽は楽しければそれでいい」というのがフランス人の基本的なスタンスなんです。そしてジャンルの言いますと、十九世紀のフランスで最も人気があつたジャンルは何と言ってもオペラでした。そして「オペラ」と言ひましても、十九世紀フランスのオペラは、例えばモーツァルトやヴェルディやワーグナーのオペラのような深い芸術性を備えたものではなくて、音楽を使った大がかりなショーのようなものだったと考へて下さい。十九世紀のフランスで大ヒットしたオペラには、マイヤベーアの「鬼のロベール」あるいは「予言者」、アレヴィの「ユダヤの女」、グノーの「ファウスト」などがあ

りますが、これらの作品は現在ではまったく上演されません。要するにこれらは十九世紀のハリウッド映画のようなもので、豪華な衣装や舞台装置、バレエ、機械仕掛を使ったスペクタクルによってお客を一晚楽しませればそれでいいという、純然たる娯楽作品だったので。

このように十九世紀フランスの聴衆の音楽趣味というものは、非常に軽薄なもので、従って交響曲や弦楽四重奏やソナタのような、ドイツ起源の「難しい」音楽は、フランスではまったく一般受けしませんでした。もちろんフランスにも、交響曲や弦楽四重奏やソナタにトライしようとした作曲家が全然いなかったわけではありません。特に一八七〇年あたりを境に、フランスにも、ただの娯楽ではなく、ドイツのような深い思想性を備えた音楽の伝統を築こう、という運動が起ってきました。深い思想を持つ音楽とはつまり、交響曲や弦楽四重奏やソナタのような純粋器楽曲のことです。こうした運動の代表はセザール・フランク、サン・サーンス、シヨーソン、ヴァンサン・ダンディといった作曲家でありまして、彼らはフランス人でありながら、交響曲や弦楽四重奏やソナタといった重厚な器楽曲を多く作りました。ところがフランスでは彼らのこうした運動は、すさまじい反発にあつたんですね。要するに「フランス人なのに交響曲だの弦楽四重奏だのソナタだの、ドイツ人みたいなむさい音楽を書きやがって」というわけです。例えばサン・サーンス、《動物の謝肉祭》で有名なカミーユ・サン・サーンスを例にとりますと、彼は現在、軽薄なフランス音楽趣味の典型のように思われています。ところが実際は彼は、交響曲とかピアノ協奏曲とかソナタとかいった、本来はドイツ起源のジャンルを多く創ったせいで、フランスでは売国奴よばわりされて、ほとんどフランスに腰を落ち着けて住めないほど激しく非難されたんですね。実際、彼の多くの作品は、フランスでは演奏してもらえないので、ドイツで初演されています。我々の目からみると「十九世紀の軽薄なフランス音楽」の代表のようなサン・サーンスですら、「ドイツかぶれした難しい音楽を書きすぎる」と攻撃される、そんな時代にロマン・ロランは育ったわけです。

こうして考えてみると、ロランがフランス人としていかに異色の人物というか、アウトサイダーだったかというところが理解して頂けるとおもいます。ご存じのようにロランは、熱狂的なベートーヴェン崇拜者でありました。しかし当時のフランスの音楽界は、下手にドイツ音楽を賛美したり、ベートーヴェン風の交響曲を書いたりすると、裏切り者よばわりされかねない状況でありました。そしてこの様な時代にあつて、まるでドイツ人のようにドイツ音楽を擁護したフランス人、それがロランであつたわけです。

II. ロランのアナクロニズム

この様に音楽学者としてのロランの功績は何より、フランスにおいて初めてベートーヴェンの音楽の価値を広く認めさせた点にあります。しかしながら音楽学者の使命は、埋もれてしまっている過去の作曲家（ロランの場合で言えばベートーヴェン）を発掘することだけにあるものではありません。同じかそれ以上に重要なのは、埋もれている同時代の作曲家を見つけ出し、世に送り出すことでもあります。そして残念ながらロランは、この点では少々時代錯誤的な（アナクロニズム的な）人物でありました。つまり彼は音楽の歴史が向かつていく方向を読み違えていたふしがあるんですね。

十九世紀においてフランスは、音楽の分野では一方的にドイツに押されっぱなしでありました。もちろんフランスで活躍した大作曲家がいなかったわけではありませんが、彼らはすべて外国人でした。例えばロツシーニやベルリニはイタリア人でしたし、シヨバンはポーランド人、リストはハンガリー人、マイヤベーアはベルリン出身というわけです。十九世紀のフランスには、フランス人の偉大な作曲家はまったくいなかった。しかしながらロランの世代、つまり一八六〇年代から一八七〇年代にかけて生まれた世代になってきますと、フランスでは目も眩むような輝かしい才能を持った若い作曲家が輩出てきます。その筆頭は何と言ってもドビュッシーとラヴェルという印象派の作曲

家でありますが、彼らより若干年上のガブリエル・フォーレも忘れてはいけません。また異端の作曲家エリック・サティが活躍していたのもこの頃です。しかしながらロランの小説や音楽エッセイの中には、フォーレについてもラヴェルについてもサティについても、ほとんど言及がありません。またドビュッシーについては、ロランは確かにドビュッシーのオペラ「ペレアスとメリザンド」は絶賛しましたが、ドビュッシーのそれ以外の傑作の数々、牧神の午後への前奏曲や交響曲「海」やピアノのための「映像」「子供の領分」「前奏曲」といった作品については、ロランはほとんど触れておりません。

既に述べたように、十九世紀のフランスは軽薄なグラント・オペラに熱をあげるばかりでありました。ロランが当時のフランスのこの様な軽薄な音楽趣味に失望したのは正しかつたでしょう。しかしながら彼は、他ならぬ自分の御膝元のフランスで、自分が暮らしているのと同じ街パリで、実は二十世紀の未来を担うことになる素晴らしい才能が生まれつつあることに、まったく気づいていなかったふしであります。

さらにロランにとって皮肉だったこととして、次の事実があります。私は先ほど、フランス人にとっては「音楽は思想や哲学などなくて結構、音楽は楽しければそれでいい」というのが基本的なスタンスだったと言いました。そしてこうした快樂的な態度が、十九世紀フランスの軽薄な音楽趣味を助長したことは、疑いありません。しかし一九〇〇年前後になると、「音楽は楽しければそれでいい」というまさにこの軽薄な姿勢の中から、新しいフランス音楽の美学が生まれてきます。ドビュッシーの言葉を引用しましょう。「交響曲を作ろうとして息切れしたりするのは、もう沢山です。」「明快、エレガンス（中略）フランス音楽は、まず第一に人を楽しませることを心がけるのですね。」「音楽は謙虚に人を楽しませることにつとめるべきです。」

この様に一九〇〇年頃になると、高い理想や哲学を振り回したりするベートーヴェン風の巨大な音楽は、時代遅れになり始めていました。時の流れはむしろ、エレガントで軽快なもの、明晰で感覺的は美へと向かっていたわけです。

しかしそんな時代にあつてロランは、ひたすらベートーヴェンとドイツ音楽を賛美していました。ヘジャン・クリストフンには次のような言葉が出てきます。「おお、力！力！力の祝福された雷鳴！（中略）その力は、しばしば凡庸であり、粗野でさえあつたが、それがどうしたというのだ！大事なことは、力があることであり、それが満々と流れていることである。」この文章を、小説家ではなく音楽学者の発言として読む限りにおいては、残念ながらロランは、音楽史の進む方向を見誤つたと断定せざるをえないのであります。

III. 「光の交響曲」——ロランのユートピア

さて、私が常々思つていますが、学者というか歴史家には三つの使命があるのではないでしょうか。まず第一の使命は、過去を発掘する考古学者としての使命。この分野ではロランは、フランスにベートーヴェンの音楽を広めるといふ素晴らしい仕事をいたしました。次に歴史家の第二の使命は、未来を占う予言者としての使命であります。そして残念ながらロランは、今申し上げましたように、音楽史の予言者としては失格だつたと言わざるをえません。しかしながら歴史家にはさらに、第三の使命があります。それは同時代、現在という時代を診断する医者としての使命があります。要するに学者というか歴史家は、過去に対しては考古学者、未来に対しては予言者、現在との関わりにおいては医者でなければならぬというわけです。そして私が音楽学者としてのロランに最も感嘆するのは、まさにこの第三の領域、つまり同時代の音楽の診察家としてのロランであります。

先ほども少し触れましたように、同時代の音楽についてもロランの目は、専らドイツ音楽に向けられておりました。つまり同時代の作曲家で彼が最も崇拜していたのは、ドビュッシーでもラヴェルでもなく、ドイツのリヒャルト・シュトラウスでありました。いかにもドイツ的な力に満ちた、シュトラウスの巨大なオーケストラ曲こそ、ロランにとつていわば、二十世紀のベートーヴェンだつたわけです。しかしロマン・ロランは、決してただのドイツ音楽かぶれ

ではありませんでした。つまり彼は熱烈に賛美すると同時に、リヒャルト・シュトラウスを中心とする当時のドイツ音楽が陥っていた危機的な状況を実に鋭く見抜いていたのであります。

ロランの言葉を引用しましょう。「ベートーヴェンの作品はうち負かされた英雄の勝利である。しかしシュトラウスのそれはうち負かす英雄の敗北である。」これは非常に含蓄の深い言葉です。例えばベートーヴェンの交響曲の第三番へ英雄を思い出してみましょう。この作品の二楽章は、ご存じの通り、葬送行進曲です。つまり作品の主人公である英雄は、一度「うち負かされる。」しかし第三楽章で再び英雄は蘇って、そして作品は第四楽章で輝かしい勝利に転じて終わります。第五楽章へ運命も同様です。この作品はいわば「うち負かされた英雄」の絶望と苦悩とともに始まりますが、フィナーレで音楽は光と勝利に転じて終わります。へ第九交響曲、混沌とした闇の中から始まり歎びの歌で終わるへ第九交響曲も同様です。

それに対してシュトラウスの作品はどうかと申しますと、これはまさにベートーヴェンの交響曲の正反対です。まずシュトラウスのオーケストラ曲はほとんど例外なしに、聴き手を力づくでねじ伏せるような大音量でもって始まります。シュトラウスは、ロラン流に言えば、最初の一撃で聴き手を「うち負かす」天才であります。しかしながらベートーヴェンとは対照的に、シュトラウスの曲は決して歎びと勝利でもって終わることはありません。具体的に言いますと、シュトラウスの作品が力強いフォルティッシモで終わることは滅多にない。何やらほそほそ低い声で呟くように「尻すばみ」に終わってしまうという、これがシュトラウス作品の大きな特徴です。要するにシュトラウスの曲は、作品の冒頭で聴き手を「うち負かした英雄」の、「敗北」で終わるのがパターンなわけです。

ロランが憧れたのは力の音楽であつたけれども、それには暴力的な力の音楽ではなく、光に満たされた肯定的な力の音楽でありました。しかし結局ロランは、こうした力を、同時代のどの音楽の中にも見いだすことが出来ませんでした。同時代のフランス音楽は確かに、光に満たされてはいましたが、力に欠けていた。そしてシュトラウスを初め

とする同時代のドイツ音楽は、確かに力に満ちてはいたが、それは暗い暴力的なものに傾こうとしていました。恐らくロランが夢みていたような音楽は、一九〇〇年という時代にあつてはユートピアでしかなかつたのであります。そして自分の夢みる音楽が、現実にはどこにも見当たらなかつたからこそ、ロランはヘジャン・クリストフンという小説の形で、自分で理想の交響曲を描こうとしたのではないか、私はそう考えております。

さて最後になります。本日のプログラミンクについて、ごく簡単にご説明しておきたいと思ひます。本日のレクチャー・コンサートを企画するに当たりまして、私と小坂さんは次のようなことを考えました。つまり「ロランと音楽」というテーマでベートーヴェンの作品ばかりを演奏するのでは芸がなさすぎる、何かロマン・ロラン的な音楽の理想、いわば「光に満ちた力の交響曲」とも言うべき理念をロランと共有するような、ロランの同時代のフランスの音楽はないだろうか、そう考へて運びましたのが、本日のプログラムの後半に演奏されますポール・デュカのピアノ・ソナタであります。

デュカはドビュッシーとも同級生だつたフランスの作曲家で、一八六五年生まれですからロランとほとんど同い年の人物ですけれども、二人の間には多くの精神的な共通点があります。まず第一にデュカは、ロランと同じく、フランス人でありながら熱狂的なベートーヴェン崇拜者でした。また第二に、デュカのこのピアノ・ソナタは、ロランが最初のベートーヴェン伝記を書いたのとほぼ同じ時代、一九〇一年に初演されました。そして第三にこの作品は、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ（とりわけ第二九番の「ハンマー・クラヴィーア」）をモデルにして創られた作品であります。これはロランが小説「ヘジャン・クリストフ」を、まさにベートーヴェンの精神と理念に啓発されて書いたのと、まったく同じ事情だと申せましょう。

私と小坂さんが本日のメイン・プログラムにこのデュカのピアノ・ソナタを選びましたのは、例えばロマン・ローラ

ンが小説の中でこの作品に触れているといった表面的な理由によるものではありません。重要なのはむしろ、ロランとデュカの作品の間の、精神的な共通点であります。このデュカのピアノ・ソナタは演奏に五十分近くかかる、ピアノストにとってはまさに拷問のような、極度に難しい曲ですが、こうしたモニュメンタルな巨大さの点でこの作品は、何かジャン・クリストフ的精神を共有していると言えるでしょう。お手元のプログラムにも書きましたが、実際この曲には、どこことなく(ジャン・クリストフ)の筋を連想させるような性格があります。要するにこのデュカのピアノ・ソナタは、ロランの(ジャン・クリストフ)と同じく、一九〇〇年のフランスからドイツに捧げられた、ペートルヴェンの精神へのオマージュという性格を持っています。

(神戸大学助教授)

ロマン・ロランと日本人たち（1）

——影響の一例として——

小尾 俊 人

先日、私は一友人からの手紙をもらいましたが、まずそれを御紹介したいと思います。

「昭和十八年、新聞に「ロマン・ロラン死去」というドイツ軍（あるいはナチ）の発表が載って、ひどく悲しんだのですが、その後、その発表はフランス・レジスタンスに対するナチスの謀略発表であったという五、六行の記事が載ってほっとしたものでした。私どもの徴兵をひかえた夏だったように思います。そのときの思いを手帖にひかえておいたのですが、この二つの新聞報道の日時がはつきりしません。……その思いの控えはつぎのようなものです。

ロマン・ロランは死んだというドイツ軍の発表があつて、

心が重い日がつづいたのであるが、

僅かなる新聞記事に心こころ和なごみぬロマン・ロランは生きてをりとふ」

というのであります。

私はびつくりいたしましたして、早速、朝日新聞の縮刷版でしらべてみました。そうしますと、たしかにありました。昭和十八年（一九四三）十月二十日の記事。

見出しに「ロマン・ローラン逝く」

本文「ヴィシー十九日発同盟、パリ来電によれば、フランスの文豪ロマン・ローラン氏は十八日パリで死去した。享年七十七。代表作は『ジャン・クリストフ』で一九一三年ノーベル賞を授けられている。劇作と評論にも著作が多い。」
その十二日後の記事。十一月二日ですが、

見出し「ロマン・ローラン健在」

「ベルリン特電一日発。仏文豪ロマン・ローランは先般死亡したと報ぜられたが、デー・エヌ・ペー通信は一日に至つて「ロマン・ローランはまだ生きています」と報じ、先月十八日彼が死んだといわれたのはロイター通信が悪意に基づく虚報を放つたものだとして素ツ破抜いた。デー・エヌ・ペーによるとロマン・ローランは今なおパリのサン・エティアン街で暮らしていると」

そして、この記事ののちに、私の友人である人の先ほどの和歌は詠まれたのであります。

「僅かなる新聞記事に心和ぎぬロマン・ローランは生きてをりとふ」

この友人にとつて、ローラン逝去の記事は、彼のいわゆる学徒出陣、よくテレビに出てまいります雨のなかの明治神宮外苑、あの出陣学徒送別会の前日に目に入ったのであります。平和と人間性の使徒のイメージであったローランの死と、戦争に出てゆく自己の運命の不安とが重なっているのであります。その強烈な印象が、十二日後に誤報とわかつて、ほつとするという、それが一首の歌として結晶したのであります。

そして、その翌年一月三日の新聞に、

「ロマン・ローラン死去」と見出しで、顔写真も出ておりますが、

「リスボン一日発同盟、パリ来電」フランスが生んだ世界的文豪ロマン・ローランは北フランスのヨンヌ州ヴェズレ

イで三十日死去した。享年七十九。ローランは一九一六年小説『ジャン・クリストフ』によってノーベル文学賞を授与されたが、その他ペートル・ヴェン、ミケランジェロ、トルストイ、ガンジー等の伝記多く、平和主義論策によって世界的に知られていた。前大戦中は反戦思想の廉で一時的に亡命したこともある。」

これは正確な報道でありまして、一九四四年十二月三十日ロマン・ローランはこの世を去ったのであります。生前の最後の主著の「ベギー」の発行日も、同じく十二月三十日となっております。

本日、すなわち一九九五年一月二十七日は、ローラン没後五十年に二十八日を加えた日にあたります。五十年記念の催しは昨年の秋いらい五回にわたって、あるいはフランスから講演者を迎え、あるいは映画会を持つなど計画され、前回までそれぞれつつがなく完了いたしました。今夕は五十年を記念する最後の日となったのでございます。

*

さて、一九四四年の八月には、パリは戦争から解放されておりますが、日本では翌年八月十五日まで続きます。日本の敗戦直前の新聞紙は、ペラー一枚の二頁に過ぎません。食糧も物資もすべて底を衝いた状態でありましたが、そうした状態にも拘わらず、ローランの記事が写真入りで新聞に三回も出た、という点において、日本におけるロマン・ローランという名の持つ印象力、影響力あるいは雰囲気、アトモスフェアというものがいかに大きかったかが分かると思えます。

明治四十四年、一九一一年、ローランが日本にはじめて紹介されました、いらい八十五年、このあいだに、五十名以上の方が、ロマン・ローランの本やエッセーを翻訳されておられます。その生前の著作はほとんど訳され、ただ没後刊行のものの一部が未訳であります。印刷された部数、読まれた部数の全体については、統計的に知ることは不可能です。

しかし、その影響の範囲、影響の深さは、外国の著作家としては、比類ないものがあると思われれます。それが、ど

んな形で、どのような姿で私たちの世界と関係を持ったのか、それを六つほどの具体的な例をとおして、観察してみたいと、考えております。

- (一) 大正初期のロマン・ロラン紹介と、教育現場への影響―長野県例
「森有正問題」、又は「精神的亡命」。
- (二) 片山訳「愛と死との戯れ」の影響の一例（魯迅）。
- (三) 大仏次郎氏（鞍馬天狗）の場合。
- (四) 渡辺一夫氏の場合。
- (五) 丸山眞男氏の場合。
- (六)

(一)

大正二（一九一三）年の三月、欧州大戦、第一次大戦のはじまる一年前の年です。ヒューザン会機関誌「ヒューザン」は、はじめて「ジャン・クリストフ」第四巻「反抗」、高村光太郎の訳で二号連載をいたします。三月号の編集後記に高村は書いております。

「私は今クリストフを訳しながら激昂しています。クリストフの心理状態をよく了解できるからだと思えます。私はこれを訳すことを喜んでみます。その純フランスな魂も私を踊らせます。二十二日」

一般的に、明治から大正にかけて、日本のオピニオン・リーダーの活躍は、いわゆる「総合雑誌」の誌上で、見ることができるのでありますが、その代表的選手として、中沢臨川の名があげられます。

当時の著名な評論家だった中沢臨川は、当時三十五才の新進で、総合雑誌の主要ライターだった人でありましたが、彼は大正二年の十一月、『早稲田文学』に「新道徳論」のエッセイで、ニーチェとロマン・ロランをとりあげました。翌年五月『中央公論』で「ロマン・ローラン」、つづいて大正四年六月同じく中央公論の「現代文明を評し、当来の新文明をトす」、同じ年発行の「近代思想十六講」で「ロマン・ローランの眞勇主義」で、ロランをとりあげております。この最後のものは、当時大変売れた本であります。

その他、内藤濯「ロマン・ロオランという人」々「争闘の芸術」この二つのエッセイが一九一四年、第一次世界大戦の年ではありますが、この年に発表されました。これら論壇での大きな紹介とともに、主著「ジャン・クリストフ」が後藤末雄氏（一九一七）と豊島与志雄氏（一九二〇）によって翻訳紹介されました。それ以後、ロマン・ローランの日本とのむすびつきは、さまざまな形で展開され、今日にいたっておりますが、私はまず、その一例を、長野県の小学校の教師の場合に見てみたいと思います。

例えば、一志茂樹とか小林多津衛とかいう人々は、教師として、生徒の自発性をうながす教育を行ったことで著名であります。一志茂樹はロランの「トルストイ」を英訳から、日本語に移しているほどであります。

一般にトルストイやロマン・ロラン、さらに「白樺」などの自由な風潮の、教育の現場への反映は、戸倉事件（T7）、川井訓導事件（大正13）などの社会的事件ともなりました。自由教育は、古い教育行政家から「気分教育」という名前をつけられ、警戒され、また警察などの監視対象ともなっております。

さて、片山敏彦先生は第二次大戦中、長野県の小諸近在の塩名田村に疎開されておられましたが、このとき出会ったのが、さきの教育者の小林多津衛という方で、現在九十才で御存命でいらっしゃいます。大正四年十九才でロランにやみつきになり、後藤末雄訳の「ジャン・クリストフ」に感激して、一週間学校を欠席して読了した、という人

ありますが、この方の「小林多津衛座談録」という一九九三年出版の本がありまして、そのなかにつきのような言葉があります。

「片山さんという方は私がこの目でいきあつた中でもっともすばらしい人だ。白樺の柳宗悦、武者小路実篤はもちろんです。この目で見て、これはすばらしい人間だと思つたのは片山敏彦と、諏訪の地理学者の三沢勝衛だね。：

片山さんという人は新しく日本中全体で見直さなくちゃいけない。私は片山精神が生きれば日本の教育は変わると思うな。つまり日本の教育は、ある時は国家主義で、ある時は文明開化という外国の教育に影響されたでしょう。ところが明治、大正ときてみて、西洋の本当の深いものを理解して生かそうとしなかつた。日本の本当に深いものも理解して生かそうとしなかつたな。それで深さのない教育がしまいに天皇中心の皇国主義、小学校を国民学校なんていうのに変えて、皇御国（すまみくに）というやつになつて敗戦を迎えたわけですね。ところが今でも、西洋の本当にいいものを理解しているだろうか、今の先生は。日本の本当に深い文化を理解しているだろうか、どうだろう。：：
そういう意味からいつて私は、片山さんという人は非常に大事な人だと思うのですがね。ところがほとんど知らないんじゃないかな、片山さんの存在を。」云々。

大正期の日本に入ったロランの影響を、長野県の小学校の先生方の実例でお話ししたわけでございます。

(二)

いわゆる「森有正問題」、あるいは「森有正現象」といわれているものが、ございます。これは日本人が外国の文化との接触によつておこつたものであります。よく御存じの方もいらっしゃると思いますが、第二次大戦後、東京大学のフランス文学の助教授だった森さんがフランスに一年の予定で留学され、帰国後に、渡辺一夫のあとを受けて東

大教授になるはずであったのであります。しかし、この計画、この予定は、渡仏後忽ちにして崩壊し、帰国は延期され、そのため、主任教授の説得も効を奏さず、当時の東大総長だった南原繁もバリーで森さんを説得したのですが、全然効果がありませんでした。日本に残した妻子とさえ一時縁切り状態になる、という始末でありました。

なぜ、こうしたことが起こったのか。それは、フランス文化、ヨーロッパ文化を理解するためには、フランス人同様にフランス語を修得する必要は勿論であります。重要なことは、頭脳や理屈による知識あるいは文字の世界としてではなく、「感覚」サンサシオンによる全身的な徹底的な吸収が必要なのだ、という、自覚でありました。

たんなる勉強とか研究でなく、文明の質的な転換、感覚の革命ともいべきものが、そこにあったのです。いいかえようと、これは一つの亡命現象です。第二次大戦下のような政治亡命ではありませんで、精神的亡命ともいえるでしょう。その引き金になったのは、おそらく、当時バリーに在任していた高田博厚との出会いであったと思われれます。それは高田博厚氏が、もともとフランス的なもの、芸術的な至高なものと思われていたものに、彼、森有正を近付けたのであります。

それは何だったのでしょうか？

高田さんは書いております。

「私より二年前前にフランスへ来て、私と行き違いのようにして日本へ帰った親友の片山敏彦でも、わずか二十日間ばかりでも一緒にバリーで暮らせたことは私にとって大きな幸になった。彼は私の為にいろいろと好いものを支度しておいてくれた。そうして来るといきなりフランスの魅力の真髓に私を導いてくれた。

「何をおいてもサント・シャベルを見るが好い。……あそこにこそフランスの精神と夢がある」というロマン・ローラの注意を受けていた彼は、後から来た私にもまずそれを伝え譲ってくれた。

……そうして片山と私は、サント・シャベルへ入ったのだった。そうして、そこで私は、玻璃を透かして来る金と

赤と紫の光のなかで、茫然と、昔ながらのフランスの精神の、というよりゴールの精神の夢のなかにおぼれていたのであった。私は確かに意識を失っていた。自分のものとも他人のものともつかぬ無量な幸福がただあたり一杯にこめられているを感じた。私はそこを去りたくなかった。私は酔っていた。決して醒めたくない、このような清純で柔和な酩酊の感情を私はかつて経験したことはなかった。祈りの感情というものが向こうから来る…

「一度行つたのみではサント・シャベルの魅力は十分に分からない。この聖なる灯が外の天候によつてどのように変わるか。晴れた日、雨の日、朝、夕方、私はあそこに坐つた。一つの窓は金色に輝く。他の一つは血のようだ。向こうの方のは青ざめている。御堂の右側はいつも明るい。左側は紫色に影のなかで輝いている。日ざしが移るにつれて、金と赤と紫と青がずれて行く。ちらちら光が移る。私は眼を細くする。一層玻璃の光の海だけになる。私はその中で眠る…」

この文章は一九三三年、高田さんが渡仏したのは三一年ですからその二年後に書かれたものです。

この同じ場面について片山先生の書かれた文章があります。つぎに読ませていただきます。

「彼（高田）がパリに来ると、スイスのロマン・ロランのもとに同行するに先立つて、私は第一番に彼を、サン・シャベルに連れて行つた。十三世紀に聖王ルイが、キリストの荊の冠を象徴して作つたこの建築と、その中の色玻璃窓とはすばらしいものである。パリで何よりも早くそれを訪れるようにとロマン・ロランから指示されていたそれは、フランスの《美》の心臓である。一般に主知主義的と呼ばれるフランス国民が、敬虔と感覺との無比の調和をここに作り出している。紅は愛の炎のように燃え、ブルーサン、シャルダン、セザンヌにつらなる碧は、セレニテに澄み、色彩の秘密がもつとも純粋なミスチックと調和している。人間精神の西と東とが、薔薇窓の光輝となつて照る。

これが、私にとつてと同様、高田にとってフランス文化の第一の洗礼であつた」（高田博厚、一九五〇・二）

ロマン・ロランを憧れて、一九二三（大正二）年渡仏した椎名其二さんという方が居られます。また、このフランスの精神的な、芸術的な、また人間的な風土、その文明と言語で、同じような運命を持った人であります。森有正とか、画家の野見山暁治氏と親しい方でした。やはり早稲田大学の教職を捨ててフランスに去って、主任教授の吉江先生の大いなる怒りを買ったそうであります。森さんもそうでしたが、椎名さんも、それにフランスでその最後の日を迎えられたのでした。あるいはみではこうした精神的亡命者としては、高田さん、片山さんあるいは古く阿倍仲麻呂なども同じカテゴリーに入るでしょう。

椎名さんのことはロマン・ロランの日記にも、

「彼は非常に聡明で教育があり、洗練された礼儀と清潔さを身につけている」と書かれています。彼は労働者として、「製本工」として、フランスで生活できることを喜びました。

森有正も椎名さんと親しく、ガブリエル・モノー・ヘルツェンというロマン・ロランと縁浅からぬ人ですが、この人の「形態学」という本の製本を椎名さんに依頼して、つくって貰い、それを、「今でも、「もの」というものの象徴のように手にとって眺めるのである」と書いております。（森有正「木々は光を浴びて」）

(三)

ロマン・ロランの戯曲、フランス革命劇の「狼」（高橋邦太郎訳）および「愛と死との戯れ」（片山敏彦訳）が、日本で築地小劇場で上演されましたのは一九二四（大正十三年）、つづいて一九二六（大正十五年）年であります。ちょうど年号が昭和にかわる直前ですが、そのときの印象を、高村光太郎がつぎのように書いております。

「築地小劇場で、ロマン・ロランの「愛と死との戯れ」を見た僕たちは、冬の壮麗、オリオン、大犬、牡牛、獅子と

というような連中が頭の真上で大眼玉をむいている築地の薄くらがりの焼跡じみた道路を歩いていた。外套や二重まわしの襟をかき立てたこのサンキュロットの六七人は、皆深い感動に胸をふくらまして、時々路ばたに立ち止まりながら互いに叫び合っていた。話をしたというにしては、皆互いに相手の言葉を聴かなすぎた。皆何かしら自分の胸からこみ上げてくる言葉を投げ出すことに気をとられていた。それは殆ど連絡のない単句の急潭であつた。やがて皆だまつてしまった。皆深く静かに湛えた心を抱いて尾張町の方は歩いて行つた。私はこの夜ほどロマン・ロランの深い心と、殆ど古代文学的な高い清らかな精神とに直接打たれたことはなかつた」(ロマン・ロラン六十回の誕辰に「大正十五年一月」)

この築地の上演の台本となつたのは、片山敏彦の訳であります。これは叢文閣によって昭和二年に出版されました。翌三年、一九二六年であります。中国の作家、魯迅その三月二十三日の日記に、彼はその住所のある上海でのことですが、「東亜公司に行き『愛と死との戯れ』(二円四十銭)『支那上代画論研究』『支那画人伝』を買ふ」と記録されております。

その二日後の三月二十五日に、彼は「死地」(又は危険地帯)という文章を書いておりますが、彼は、ここに買ったばかりの「愛と死との戯れ」の核心部分をひいて、その一週間前に起こつたいわゆる「三・一八事件」の批評をしております。これは当時の軍閥、段祺瑞政府が純真な青年たちの請願の動きをわなにかけて、死傷者三百人以上を出した虐殺事件であります。魯迅は、この三月十八日を、「民国以来最も暗黒なる日、これを記す」とのべておりますが、その魯迅の書いた文章の一節を読んでみますと、

「いまちようどロマン・ロランの『愛と死との戯れ』が私の前にある。その中にこういつている。"カルノーは人類の進歩のためには、多少の汚点は差し支えない。万やむを得ない場合は、多少の罪悪さえも妨げないと主張した。しかし彼らは却つてクルヴォアジェを殺したくなかつた、なぜかなら共和国は、彼の死骸を腕に抱いているのを喜

ばなかつたら。それはあまりにずつしりと重すぎたから。”

死骸の重さを感じ得て、抱いているのをねがわない民族のなかでは、先烈の「死」は後人の「生」への唯一の靈藥である。だが、もはや重さを感じることもない民族では、押しつぶされてともに亡び去るものでしかありえない。

改革の志を抱く中国の青年は死骸の重さを知っている。だからとかく「請願」だ。だが他に死骸の重さを感じない者らが別におり、しかも「死骸の重み」を知っている心をひとまとめにして屠殺していることには、彼らはまるで気づかない。

死地はまぎれもなく、すでに前方にある。中国のたを思えば、覚醒した青年はかるがるしく死ぬようなことをしてはならない」（三月二十五日）

以上が魯迅の引用です。

これは国家と正義との最大の対立の瞬間においての、魯迅の判断でありました。そしてそれがまたロマン・ロランの思想そのものでもありました。片山訳がここに一つの触媒的役割を持ったことを興味深く思うのであります。なおロマン・ロランは、中国人に告げる一文を草しており、中国版「ジャン・クリストフ」に付けられたものですが、つぎに御紹介したいと思います。

ジャン・クリストフから中国の友人たちへ

「私はヨーロッパとかアジアとか、そうした区分は知りません。私の知っているのは、世界の二つの兄弟であります。一つは上部へ向かって上昇する魂であります。他の一方は、下方へ向かって墮落してゆく魂であります。

前者は、忍耐がよく、情熱をもっており、ねばりよく、勇敢です。彼らは光りの下にある人々です。そのまっつき光とは科学であり、美であり、愛であり、共同の進歩であります。

後者は圧倒的なさまざまな力——それは暗黒です、無知です。残虐さです。また頑固な偏見や野蛮さです。

私は前者の側に立ちます。そうした人びとが、どこにあらうとも彼らは私の友人たちであります。そして同盟者、兄弟なのであります。私の祖国は、解放された人類全体です。もろもろの偉大な民族のそれぞれは、この祖国の一つの地方であり州なのです。そして万人の、すべての人間の財産は神 \equiv 太陽なのであります。

一九二五年一月

ロマン・ロラン

同じ年の十二月、ロランは「日本の友人たちへ」の文も書いております。

(つづく)

(ロマン・ロラン研究所理事)

ロマン・ロランをめぐる

—デュシャトレ教授に訊く

記録作成—B・デュシャトレ

村上光彦 訳

一 ロマン・ロランが受けた影響

Q R・ロランとスピノザとの関係はどのようなもの
したか。

A R・ロランは自分でも、スピノザから多大の影響を
受けたと言っています。スピノザは彼にとって、青
年時代に〈閃光〉の契機となったのです。彼はスピ
ノザのおかげで神的な「存在」を発見したのでして、
「存在の大洋」という彼の宗教観は、その大部分が
この発見に由来しているのです。R・ロランは「内
面の旅路」のなかで、この哲学者に負うところを表
明しています(一)。

Q R・ロランが「福音書」をめぐる行つた「対話」

のことがお話に出ましたが、これは未発表の作品で
しょうか。

A 「福音書」をめぐる対話」は、R・ロランが最晩
年に専念して、その最後の本となったものです。四
福音書についての省察です。R・ロランは福音書を
つきつきと読み進めて、感じたままに書き留めてい
ったのです。それから彼は、イエズスをどのように
思い描いたかを語っています。彼にとって、イエズ
スはいかにも傑出した人物ではあるが、やはり人間
であつて「神」ではないのです。この「対話」は、
R・ロランの手では刊行されませんでした。何年か
まえに、わたしが刊行したのです(二)。

Q R・ロランはルナンの弟子でした。この本はそのこ
とを示していないでしょうか。

A たしかに、ルナンは青年時代のR・ロランに影響を
及ぼしました。R・ロランは高等師範学校在学中に
彼を訪問しています。彼はルナンのものをたくさん

読みました。そのあと、ルナンが人間性についてあまりに懐疑的なように思えてきて、だんだん遠ざかっていったのです。じつのところ、宗教面において、キリストの神性という問題において、また福音書の読み方において、彼は非常にルナンの的です。

Q ルナンの影響については、ほかの要素を見てとることもできるのではないのでしょうか。

A そのとおりです。彼はある論文の表題としてルナンの言い回しを用いています。へ人類～が進歩に向かって苦勞しながら登ってゆくことを説明するための「つづら折りの登り道」がそれです(註)。

二 ロマン・ロランとソ連

Q 「ロベスピエール」のお話をなさったなかで、R・ロランのこの劇にはソ連での状況が反映していると言われました。R・ロランが一九三六年にソ連の状況を目にし、スターリン裁判のことを知ったとき、

彼の心理的な立場はどうだったのですか。

A 当時のR・ロランの立場は厄介なものでした。なにぶんにも、彼はロシア婦人のマリー・クタシエヴァと結婚しており、その息子のセルゲイが妻帯者で、妻といっしょにソ連で暮らしていたからです。一九三〇年代の初めには、R・ロランはスターリンを擁護しました。ソヴェト体制はソ連にとつてはよいものだ、新世界が作り出されようとしており、これを励まさなくてはならない、と考えていたのです。一九三六年の第一次裁判のさいには、R・ロランはそれが正当な裁判だと信じました。グリキーを信頼して、彼から聞かされたことを信じていたからです。彼は公的な説明を信頼していました。一九三七年には、動揺はしたものの、なにも言いませんでした。一九三八年には、それが本当の裁判ではないことを悟ったのです。どう考えてもグリキーは暗殺されたのだとわかっただけに、なおさらのことでした。彼はそれ以後、そのとき演じられつつあるドラマを理解しはじめました。しかし——そこが彼を咎める

べき点ですが——彼は口にしませんでした。感じたままの反応を公然と表明したくなかったのです。それはおそらく、妻とともにソ連で暮らしているマリイの息子のためであり、またその妻の実家すべてのためでした。R・ロランは、もし自分がソ連に對抗する発言をすれば、この家族にたいして報復が行われることになるのを知っていたのです。彼は心理的に困難な立場にありました。ともあれ、スターリンがヒトラーと同じくらい全体主義者であることを理解するまでには、彼は時間がかかったのです。

Q マリー・クダシエヴァは、R・ロランが出会ったとき、ポリシエヴィキだったのでしょうか。

A マリー・クダシエヴァは、フランス人の母親とロシア人の父親とのあいだで生まれました。幼いころしばらくフランスで暮らしましたが、どこよりもロシアで暮らして、同地のフランス人学校で教育を受けたのです。ごく若いころ、セルゲー・クダシエフという公爵と結婚しました。この結婚によって、彼女

は〈旧制度〉の側にいたわけです。一九一七年の革命のさいには、彼女の夫は白軍内で勤務していました。一九二二年にチフスで死んでおります。その当時、マリー・クダシエヴァは公爵夫人で、ごく幼い子どもを抱えていましたが、ポリシエヴィスムに転じました。それからというもの、彼女は体制に奉仕してきたのです。

Q 彼女が生まれたときの事情はどんなふうだったのですか。

A 彼女の母親のアデル・キエヴィリエは、前世紀末にある貴族の家庭で家庭教師をしていました。その家族のだれかとのあいだで子どもができたのです。それは女の子でしたが、認知されませんでした。父親不明の私生児ということにされて、パーヴェルとかいう人が名づけ親となり、その人から戸籍上の姓をもらっています。旅券上ではマリア・バヴロヴァと名乗ることになります。マリーは実父のことをほとんど知りませんでした。そのせいで——とにかく、

自分で何度もそのことをはつきり語っていますが――彼女はたびたび年上の男に心を引かれたのです（そういうわけで、R・ロランとは年齢がずいぶんかけ離れていました）。自分がもてなかつた父親を、年上の男たちのうちに見いだしたいと思つたのです”

Q スターリンこそは、ソ連における状況の責任者でした。だれかスターリンよりすぐれた人が指導したら、ソ連の状況はもつとよくなつたでしょうか。

A じつさいR・ロランは、一九二七年から一九三〇年にかけて革命が低迷しているのを見たとき、そのとおりのことを考えたのです。一九三五年にソ連に来たときには、彼はブハーリンのことを、おそらく実際以上に影響力を持つてるように考えていました。ソ連が多大の進歩を遂げうるかもしれないと、R・ロランはまだ思つていたのです。しかし彼はスターリンのほうが強いことを見落として、彼については思い違いをしました。フランスのほかの多くの

作家と同じく、R・ロランは一九三二年から一九三五年までは、ソ連で新世界が生まれつつあると信じていたのです。スターリンが勝つだろう、そうしたらんでもないことになるだろうと、早くも悟つた人たちもいました。R・ロランは、当時権力の下僕だつたゴリキーを過信していたために、そのことがわからなかつたのです。ブハーリンが指導に当たつたらソ連は同じ目に会わずにすんだかもしれないというのは、そのとおりかもしれません。

Q R・ロランが民主主義か独裁かということであつたのはなぜですか。この変わり方は、どう考えたら説明がつくのでしょうか。

A どうもR・ロランは、ソ連で起つていふことをつねに正しく評価していたとは考えられません。一九二九年―一九三〇年以降、彼はなによりもマリイ・クダシェヴァが翻訳した宣伝文書がもたらしたもので満足していました。そして彼の判断は、御用スポークスマンのゴリキーが彼に断言したところにもと

づいていたのです！ 一九三五年にソ連に赴いたときも、そこでなにが起きているのかがあいかわらずよくわかっていたのです。彼が書いた旅行記を読めば、その点が確認できます(4)。R・ロランはいくつかのことからは正しく見ていたのに、ほかのことがらで、まるきり見落としてしまったことがいろいろあります。

Q 当時のフランス人には、ソ連の現実がなかなか見えませんでした。どう考えれば、その説明がつくのでしょうか。

A ソ連の現実についてですが、それにしても、この現実を見て取って告発した人たちの証言がなかったわけではありません。たとえばP・イストラティ、H・ギルポー、V・セルジュなどです。しかしR・ロランは彼らの証言をはねつけました。それに彼はどこか矛盾したところがありました。一方ではいつもこう語っています。「わたしは歴史家で、証言の価値を知っている。」他方では、一連の証言に目を

向けるだけで、ほかの種類の証言を忌避するのです。どうかしています。いろいろ先入観があつて、そのせいで十分に広い見方ができなかったのです。

三 ロマン・ロランとガンジー

Q 一九二三年にR・ロランはガンジー伝を書きました。R・ロランは当のインド人たちよりも早く、彼の価値を正しく認めていたように思われます。

A じつさい、R・ロランは当のインド人たちよりも早くガンジーを認めました。彼はガンジーのうちに非暴力革命家を認めたのです。それはR・ロランにとって大問題でした。革命には賛成でしたが、暴力には反対だったからです。一九一七年に、彼は革命に挨拶を送りましたが、ロシア人にこういう警告を發しました。「二七八九年のわが国のようなことはしないでください。ああいう行き過ぎは回避してください。暴力に引きずられないでください。」一九二一年―一九二二年には、彼は暴力のほうが勝ったの

を見てひどく落胆しました。革命には賛同し、暴力は拒否して、そのあいだで悩んだのです。さてガンジーは非暴力革命の模範を示しました。R・ロランにとって、彼は一種の理想を体現していたのです。

だからこそ、ガンジーに挨拶を送ったのです。暴力抜きで大衆を引っ張って行く力のある人物を彼のうちに認めていましたから。彼はガンジーを英雄視し、新たななるキリストとみなすところまでいきました。彼が書いた伝記は、ガンジーを理想化した聖人伝です。ガンジーのまわりにいる人たちをキリストの弟子たちになぞらえ、彼の大義に献身する女性たちを福音書の《聖女》のごときものにしたのです。

Q 一九二三年には、ガンジーが聖人か食わせ者かといったことはだれにも言えなかったのです。R・ロランが、こうしてガンジーの使命を予言しているのは驚くべきことです。

A じつさい、R・ロランにはガンジーの行き方がよくわかったのです。残念なことに、あとではスターリ

ンのことがわかりませんでした！ インド人ガンジーについては正しい見方をしたのに、ロシア人スターリンにかんしては大間違いをしました。

Q 「マハトマ・ガンジー」はじつにすぐれた本です。では、R・ロランが暴力に荷担したのはなぜですか。

A R・ロランは、いったんは、非暴力がそれ自体として、また絶対的な意味でよいものだと考えたのですが、それはインドでは可能であり、成果を生むことがありえても、西欧には適合しえないと思ってしまうのです。そのとき、R・ロランの見方が変わったのです。

四 ロマン・ロランと日本

(D—デニシャトレ教授
J—日本人出席者)

D 今度はわたしのほうから、R・ロランの著作の刊行者にお尋ねしましょう。R・ロランが日本で読まれたのはなぜですか。

J 一九一一年に東京で「ベレアスとメリザンド」が上

演されました。そのとき、R・ロランのドビュッシ
ー論が翻訳されました。こうしてR・ロランは日本
に登場したのです。そのあと第一次世界大戦後に
「戦いを超えて」や「先駆者」が訳されました。そ
れからR・ロランの数々の論文が訳され、つぎが
『ジャン・クリストフ』の番で、それは第二次世界
大戦以前に二度翻訳されました。こうして日本人は、
R・ロランのことをさらに深く知ったのです。第二
次世界大戦後には、翻訳がたくさん出ました。しか
し今日では、R・ロランはだんだん読まれなくなっ
ていきます。「ジャン・クリストフ」と「ベートーヴ
ェンの生涯」とは、R・ロランの精神の高邁さと、
彼の理想主義の力強さとのゆえに、日本の青年のあ
いだに多大の関心と熱情とを呼び覚ましました。

D R・ロランは何人かの日本人と文通しましたが、そ
の手紙は保存されていますか、そうなら、どこにあ
りますか。

J 文通者のなかには、高知でいまも健在の上田秋夫

(九十四歳)がいます。彼はたくさん文通しました。
片山敏彦、尾崎喜八、彫刻家の高田博厚もいます。
上田秋夫のところにはR・ロランの手紙がとつてあ
ります。R・ロランから尾崎宛ての手紙は尾崎夫人
のところにあります。片山宛ての手紙は東京の片山
文庫にあります。これらの手紙の写しはすべて、パ
リのマリー・R・ロランの文書保存所にもあるはず
です。

D たしかにそのR・ロラン・コレクションに入ってい
ますが、それはマリー・R・ロランが亡くなってか
らフランス国立図書館に移されています。ところが
このコレクションはひどく乱脈な状態に陥っていま
した。いまもまだ整理中です。この作業は長くかか
ります。わたしはいまR・ロランの全書簡を集める
努力をしています。数年前にわたしは「公表された
手紙の年代順目録」を作成しました。これに未発表
のあらゆる手紙を加えて増補しています。全体がコ
ンピュータに記録してあります。なおまた、本文を
すべて集めようと心掛けています。マリー・R・ロ

ランは、手紙のタイプによる写しをわたしに用立ててくださったのですが、あいにくなことにそれらの写しは往々にして間違いだらけです。確かめなくてはなりません。現物に当たるか、それができなければマイクロフィルムか、フォトコピーに当たる必要があります。さらにまた、もし保存してあれば封筒を調べることも興味深いのです。封筒からは、日付について役に立つ情報が得られます。そのほかに、R・ロランが手紙のほかに本を送ったかどうか、またそれに献辞を添えたかどうかを知ることも興味深いのです。

五 ロマン・ロランの〈日記〉

Q ところで日記は？ いつ公開されるのですか。

A 〈日記〉の問題はですね——マリー・R・ロランは生前にその抜粋を公表しましたが——単純な仕方を取り決めがしてあります。現物には封印がしてあって、二〇〇〇年にならないと解除されませんから、

そのときが来るまで待たなくてはなりません。ただし場合によりけりですが、すでにマリー・R・ロランが作成したり、書簡集に添えられたりした日記の抜粋は別です。それが刊行されたら、たしかに興味深いことでしょう。なかでも、あるいくつかの時期に関係したページなどでしたら。生前マリー・R・ロランは、わたしがその〈日記〉を読むことを許して下さって、タイプ・コピーが若干あります。

Q 一九三九年の独ソ条約のさいに書かれた日記を読まれたあと、どういう印象をお受けになりましたか。

A まず考えたのは、これが公表されないのは残念だ、ということですね。じつさいこれを見れば、当時のR・ロランの立場がはつきり浮かび上がってきますし、R・ロランについて抱きうる見方に陰影を添えることができます。それから、こういうことに気がついたのですが、一九一四年から一九三九年までのうちに、R・ロランの立場はすっかり変わってしまったのです。一九一四年には、彼ははつきり言いま

した。「われわれの良心が語れと命ずることを語らなくてはならない。」一九三九年には、彼は言います。「わたしは発言するわけにはいかない。だから黙っている、すくなくとも公の場では。」一九一四年には、自分が考えていることを声高らかに語ることを恐れてはならない、と言ったのです。一九三九年には、彼は思いきった発言はしませんでした。

Q なぜですか。マリーの息子のためですか。

A そうです。それにソ連に残っていた家族のためです。しかし一九一四年には、フランスにいた人たちや塹壕で戦っていた人たちに向かって、彼は「戦いを超えて」と言ったのです。一九三九年には、思いきって公然と戦いを超えたところに身を置こうとはしませんでした。そこで彼は、一九三九年の新編「戦いを超えて」となってしかるべきものを「日記」に書き留めました。もつとも彼は、妻と、ソ連にいる彼女の息子とその家族とのために、思いきってこの本を書くわけにはいかないのを認めています。そこでこういう疑問が生じます。「事情のいかんを問わず、

みずからの良心にしたがって発言すべきなのか。」一九一四年のときの態度に忠実だったなら、彼はこう言うべきだったのではないでしょうか。「わたしはどんなことが起こっても発言して、スターリンの全体主義を、またなによりも彼が自分を信頼している諸国民を欺きながら、破廉恥にもその政策を遂行してきた態度をこそ告発しよう。」もつとも一九一四年には、フランスにいた彼の親族にはなんの心配もありませんでした。一九三九年のマリーの家族のばあい、事情は同じではなかったのです。

(注は69頁にあります)

出席者(アルファベット順)

デュシャトレ夫妻

宮本エイ子

森本達雄

村上光彦夫妻

永田和子 大谷暢順

小尾俊人 佐々木斐夫

(1) 「内面の旅路」新版(アルバン・ミシエル社、一九五九年刊)、第二章「三つの閃光」参照。R・ロランはスピノザの〈閃光〉について語っている、三二—四一ページ。

(2) ロマン・ロラン「最後の扉の敷居ぎわで」(デュ・セル社、一九八九年刊)参照。この書物には、修道士たちとの往復書簡(一九三八年—一九四四年)、この時期にかかわる〈日記〉の抜粋、「福音書」をめぐる対話」が収められている。

(3) ルナンとR・ロランとの関係については、セルジュ・デュレの、十分に資料の裏付けのある論文「エルネスト・ルナンに向かい合うロマン・ロラン——感嘆から論難へ?」(『フランス文学史雑誌』一九九四年、第一号、七四—一三三ページ)参照。

(4) ロマン・ロラン「モスクワへの旅」カイエ・ロマン・ロラン第二九卷、(アルバン・ミシエル社、一九九二年刊)参照。

ロマン・ロラン研究所の活動

財団法人ロマン・ロラン研究所は、ロマン・ロランの翻訳と研究に生涯を捧げた元・大阪市立大学教授 宮本正清（1898～1982）の私財を主に1971年4月、設立されました。

ロランの一国家一民族にとらわれない全世界、人類のユニテと調和をめざした人間愛の思想を、後世に遺したいという強い願望から生れたものです。これまでの重要な活動である公開講演等は次のとおりです。（敬称略）

- | | | |
|--------------|--------------------------------|----------------|
| 1971. 5. 15 | ロマン・ロランと日本の青年（短編映画『ロマン・ロラン』上映） | 宮本 正清 |
| 1971. 11. 27 | 苦悩のなかのインド | 森本 達雄 |
| 1972. 6. 24 | ロマン・ロランとフランス革命 | 波多野茂弥 |
| 1973. 5. 26 | ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心に | 高井 博子 |
| 1973. 12. 18 | 私の人間観 | 末川 博 |
| 1974. 6. 29 | 私の通った芝居の道 | 毛利 菊枝 |
| 1974. 12. 5 | ロマン・ロラン没後30周年記念一講演と音楽の夕べ | 佐々木斐夫 |
| | | 演奏：玉城 嘉子 |
| 1976. 7. 11 | ロマン・ロランとゲーテ
ユダヤ民族と西洋文明 | 南大路振一
岡本 清一 |
| 1977. 2. 10 | 中国文学とロマン・ロラン | 相浦 杲 |
| 1989. 4. 20 | ロマン・ロランの反戦思想と現代 | 加藤 周一 |
| 1989. 6. 9 | ロマン・ロラン全集と私 | 小尾 俊人 |
| 1989. 9. 29 | ロマン・ロランの革命劇から一フランス革命200周年の記念に | 中川 久定 |
| 1989. 11. 17 | ロマン・ロランとの出会いから | 尾埜 善司 |
| 1990. 1. 27 | ロマン・ロランに負うもの一平和と音楽 | 新村 猛 |
| 1990. 6. 2 | ロマン・ロランとガンディー | 森本 達雄 |
| 1990. 9. 26 | 『魅せられたる魂』と私 | 樋口 茂子 |
| 1990. 10. 26 | 占領時代における日本社会とロマン・ロラン | 小尾 俊人 |
| 1990. 11. 30 | ロラン・片山・ヘッセ | 宇佐見英治 |
| 1991. 3. 1 | ロマン・ロランと私 | 松居 直 |

1991. 6. 4	ロマン・ロランとベートーヴェン	青木やよび
1991. 9. 27	ロマン・ロランとデュアメル	村上 光彦
1991. 10. 25	ロマン・ロランの思想の二面性	兵藤正之助
1991. 11. 29	初めにロマン・ロランあり	岡田 節人
1992. 1. 29	自伝的諸作品について	佐々木斐夫
1991. 6. 26	〈大洋感情〉と宗教の発端	岩田 慶治
1991. 9. 25	ロマン・ロランとイタリア	戸田 幸策
1991. 10. 30	ロマン・ロランの革命劇をめぐって	鶴見 俊輔
1991. 11. 27	宮本正清 没後十年記念追悼会	
	静かにやさしき顔	佐々木斐夫
	ふしぎな静けさ—宮本正清の世界	小尾 俊人
	ピアノ演奏	山田 忍
1993. 1. 29	ロマン・ロランの演劇の世界	石田 和男
1993. 5. 24	ガンディーとロマン・ロラン	山折 哲雄
1993. 6. 23	『魅せられたる魂』を語る (前)	重本恵津子
1993. 10. 15	『魅せられたる魂』を語る (後)	重本恵津子
1994. 9. 9	ロマン・ロランと音楽	中野 雄
1994. 10. 14	神秘と政治—ロマン・ロラン、その思索と行動のあいだ	
		B. デュシャトレ
	ロランとフランス革命	河野 健二
	自然科学とゲーテ	岡田 節人
1994. 12. 3	ロマン・ロランとドイツ音楽	岡田 暁生
	ピアノ演奏—ベートーヴェン、デュカ他作品	小坂 圭太
1994. 12. 24	おはなし「ビュールとリュス」と「また逢う日まで」	今江 祥智
	映画上映「また逢う日まで」監督 今井 正	
1995. 1. 27	ロマン・ロランと日本人たち	小尾 俊人

月例会の《読書会》は169回（日本ロマン・ロランの友の会時代から数えると344回）を迎えます。「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」をはじめ、ロランの諸作品を、読んでまいりました。1992年からは「ロマン・ロランと音楽」をテーマに神戸大学助教授岡田暁生氏を講師に自由な雰囲気ですんでおります。

感謝 謝 ロマン・ロラン没後五十年記念 1994年度

賛助会員、寄付者名簿 (アルファベット順・敬称略)・特別会員

- 有馬通志子 蘆田ひろみ 浅井 幸 芦田 友秀
 安倍 道子 安倍 秀風 ブリユーネ・アンドレ
 シッシュ・D・由紀子 出口 治男 海老 一郎
 福井 友栄 福田万紗子 福田 真人 古家 和雄
 畑中 正一 畑中 和子 浜田 陽 仁井 国雄
 林 次郎 日野二三代 樋口 茂子
 法蔵館・社長 西村 明・今江 祥智
 ・稲畑産業株式会社・社長 稲畑勝雄 井土 熊野
 井土 真杉 乾 昌明 伊砂 利彦 岩坪嘉能子
 加藤 澄子 狩野 直禎 清原 章夫 岸田綱太郎
 喜多 寿子 近藤 正雄 川勝 三郎 河田 厚公
 北垣 博美 北垣みどり 木之下洋子 熊木 秀雄
 小牧 久時 栗林 弘 小貫 桂子 前田 和子
 三好 暁光 美木 陽子 前田 政昭 本野 妙子
 森内富美子 村上 光彦 森本 達雄 宮本エイ子
 森久 光雄 松井 菊恵 虫賀 宗博 成田 雅美
 西村喜代子 西原久美子 永田 和子 西成 勝好
 野村 庄吾 鍋谷 郁二 中津 雅野、野口 榮子
 西村 淳男 中川 久定 中川 春江・小尾 俊人
 ・岡田 節人 小田 秀子 折田 忠温 大出 學
 落合 孝幸 大川起示子 岡部 素行 奥 和義
 奥 彦徳 大谷 暢順 大谷 史朗 大谷佳世子
 ・千 登三子・佐々木斐夫・三友居・社長 山本 勝
 坂谷 千歳 佐藤ミサエ 佐久間由紀子 坂西伸夫
 志賀 鍊三 杉本千代子 重木恵津子 杉本 峯子
 鈴木 文代 佐藤てる代 佐川 一郎 新宮恵美子
 杉田 谷道 手塚みどり 谷岡 武雄 田中阿里子
 田代 輝子 鳥井 素三 高橋佐多子 朝長梨枝子
 谷口 良則 タゴール映子 多田淳子 谷口 良三
 長 美穂 千阪 靖朗 武田久仁子 辻 孝三郎
 梅原 ふさ 内田真理子 氏家 玲子 宇佐見英治
 和田 育子 渡辺 都 安田 俱子 山下 雅子
 吉原 圭子 山本 信子 八木美佐子

(一九九四・十二月三十一日締切)
 計(二〇六五、〇〇〇円)

あとがき

一 思いがけない阪神大震災で御災厄に遭われました皆さまに、心からのお見舞を申し上げさせていただきます。はからずも思い出しましたのはロランが「周航」(内面の旅路の一章、全集17巻五五四頁)のなかの言葉です。「日本の魂が、己れの心のうちに建ててゐる支配力は、火山性の島々の上に築かれたその帝国と同じように古い。聖なる山の雪の下では火が燃えている。そして周期的にその火が、品位に充ちた都市の姿を震わせる。都市がこの火の動悸を感じない日は一日もないのである。しかし、日本の魂の、このヒロイックな芸術家の、彼らの描く行動の路線がそこなわせることはあり得ない。氷と火と、山と海と彼らはそれによつて調和をつくつてゐる」この文章は彼が一九二〇年代に知りあつた日本人たち、その「東京と京都との若いジャン・クリストフたち」において、あんなみずみずしさとなんな炎、熱意のあのような薪、あのような情熱と涙、誇り高い意思力がコントロールしている、この心情のロマンティズム」に感じて書かれた文章であります。

日本がこの二つの間の均衡の感覚を喪つたとき、あの災厄が日本人全体の運命への予告として訪れたのでありましょう。勇気をもって立ち上がりたいと存じます。

一 ロラン没後五十年記念の催しは、予定通り、つつが

なく終了いたしました。皆さまの御協力に心からのお礼を申し上げます。

フランスのプレスト大学教授デュシャトレ氏は御夫妻ともども本研究所のために来日して下さいました。感慨ぶかい講演は本冊子で、改めて各位に御吟味たまわりたいと存じますが、氏の談話に、五十周忌の催しとして、このような盛大さはドイツにも見られなかつたとのことでありました。

なお、氏の編集したロランの著作は「ロランとNRF」
「モスクワへの旅、一九三五・六月―七月」
「最後の門の敷居に立つて―日記と対話」などがありますが、残念にも未訳です。追いついて日本語で紹介したいと思つております。

あらためて講師の皆さま、聴衆の皆さま、運営にあつて資金や無償奉仕で御協力なされた方々に、心からの御礼を申し上げます。

ユニテ部

小尾俊人

野村庄吾

西村 明

宮本エイ子

表紙 装丁

小尾俊人

U N I T É

Numéro Spécial
consacré
au Cinquantenaire de la mort de
Romain ROLLAND

Romain ROLLAND et la musique de son époque..... Takasi NAKANO

Mystique et Politique : Romain Rolland

—Entre la Pensée et l'Action—..... Bernard DUCHATELET

Romain ROLLAND et le théâtre de la révolution française

..... Kenji KAWANO

Gœthe et ma spécialité, la science Tokindo OKADA

Romain ROLLAND et la musique allemande..... Akeo OKADA

Romain ROLLAND et Japonais..... Toshito OBI

Entretien sur Romain ROLLAND..... Bernard DUCHATELET

Mitsuhiko MURAKAMI

Activites

Patronage : Consulat Général de FRANCE / Institut Franco-Japonais du KANNSAI

Publication : Institut Romain ROLLAND

32 Ginkakuji maé, Sakyo-ku, Kyoto, TEL. & FAX. 075-771-3281

MYSTIQUE ET POLITIQUE : ROMAIN ROLLAND ENTRE LA PENSÉE ET L'ACTION

Bernard DUCHATELET

Du Romain Rolland auteur de *Saint Louis*, sa première pièce publiée, en 1897, où il exalte la foi en Dieu, au Romain Rolland qui fait en 1935 un Voyage à Moscou et se présente officiellement comme le défenseur de l'URSS stalinienne, quel chemin parcouru ! L'homme a-t-il, à ce point, changé ? Comment expliquer des visages aussi différents ?

Romain Rolland a paru, même à ses amis, contradictoire. Et cependant, l'on sent en lui une permanence. Pour comprendre cet homme qui a vécu de 1866 à 1944 et qui a pris des positions souvent mal comprises, dans une Histoire qui, à deux reprises, a bouleversé l'Europe, il ne faut pas oublier la mise en garde qu'il a souvent faite.

S'il a fait sienne la devise de Goethe : "Meurs et deviens !" il a souvent répété que pour juger un homme il fallait tenir compte de sa trajectoire complète. Déjà, à propos de son héros Jean-Christophe, il notait que, pour bien le comprendre, il fallait non pas le regarder en une heure de sa course, mais embrasser l'ensemble de la route : "Ce n'est qu'au terme de cette vie que se dévoilera le sens de ses formes successives, de ses contradictions apparentes et de la loi intérieure qui les explique et

les harmonise."¹

Dans chacune des biographies qu'il a écrites Romain Rolland a toujours voulu montrer cette loi intérieure qui explique et harmonise ce qui peut paraître éléments contraires. Tâchons de le faire dans son cas et voyons comment ses engagements ont toujours répondu à une nécessité intérieure, à une vision mystique du monde.

Très tôt, à vingt-deux ans, Romain Rolland fixe son "Credo" ; il l'a élaboré à partir de Spinoza, de Wagner, de Tolstoï et de quelques autres ; il s'est fait du monde et de la vie une vision qu'il exprime dans une oeuvre de jeunesse, datée du 4 mai 1888 : *Credo quia verum*. Chaque homme est une parcelle du grand Tout, qui est la Vie et l'Être, et, dans sa vie individuelle, participe à la Vie Universelle, qui est Dieu. Partie du Temps et de l'Espace, le moi se confond avec l'Un cosmique qui le dépasse et l'englobe ; "l'homme est une incarnation passagère de Dieu"². Chacun doit jouer son rôle dans la symphonie d'ensemble et aider les autres hommes à participer au Divin. Le rôle de l'artiste est de faire sentir la Force divine qui s'agite en chacun des hommes. C'est une façon de les aimer que de réveiller en eux la Foi en la Vie et de les rassembler dans cette Unité. Romain Rolland conclut ainsi son *Credo* : "Une seule Ame nous anime. Immense, polyphonique. Et l'Amour est le lien du prodigieux accord, qui est fait des combats aussi bien que des étreintes. L'Amour est le feu de vie. Sans lui,

1. Romain Rolland, *Pages choisies*, avec une introduction et des notes par Marcel Martinet, Ollendorff, 1921, vol. 1, p. 211.

2. *Le Cloître de la rue d'Ulm*, "Journal" de Romain Rolland à l'Ecole normale (1886-1889), suivi de "Quelques lettres à sa mère" et de "Credo quia verum", Avant-propos d'André George, *Cahiers Romain Rolland* n° 4, Albin Michel, 1952, p. 371.

tout est Nuit."³

Ainsi le moi vit d'une double vie, en quelque sorte. Il participe de la Vie Universelle, du Moi cosmique, qui le dépasse et l'absorbe, puisque cette Vie était avant lui et sera après lui ; mais il est ce moi d'aujourd'hui, le temps de sa vie présente. D'où la question qui se posera dans des termes parfois différents, mais qui sera finalement toujours la même : comment vivre ce temps présent, l'histoire de son moi personnel, de façon à coïncider avec la Vie Universelle, le Dieu qui dépasse l'homme ? Comment dans son action (politique, pour ainsi dire) rester fidèle à sa vocation (mystique) ? Où se situe la liberté du Moi individuel ainsi pris dans le courant de la Vie Universelle ? A quoi s'ajoute une question subsidiaire importante : le rôle de l'artiste est-il de se mêler à l'action (pour un rôle politique, en s'engageant) ou de faire sentir le Divin présent en chaque être (exprimer une vision mystique) ?

Toute sa vie Romain Rolland sera travaillé par cette question. Par nature il est rêveur, contemplatif et soucieux d'insuffler la foi qui est la sienne. Mais, à plusieurs reprises, il est entré dans l'action. Il se jugeait bien lui-même, le 10 novembre 1914, quand dans une lettre à Marcel Martinet il écrivait : "Je ne suis pas un homme d'action. Je n'étais pas fait pour l'action, je suis un contemplatif qui aime à voir, à comprendre, à chercher le rythme et l'harmonie cachés. Cependant la sincérité même d'une vision indépendante et un instinct de justice m'ont, deux ou trois fois dans ma vie, forcé à prendre parti dans l'action, contre l'insolente tyrannie d'une opinion oppressive et dégradante."⁴ De

3. *Ibid.*, p. 379.

4. Romain Rolland, *Journal des années de guerre, 1914-1919*, Albin Michel, 1952.

même, le 22 avril 1920, il écrivait à Sofia Bertolini : "Je peux dire que j'aurai été mené dans ma vie par mon nom. De nature, j'étais un petit garçon tranquille qui ne demandait qu'à rester en paix. Mais mon nom n'était pas tranquille, lui ; il sonnait la charge ; il m'a mené tambour battant."⁵

Revenons en arrière et observons la vie et les oeuvres de Romain Rolland, à la lumière de ces considérations.

Dès le début, dans ses premiers drames et jusqu'à sa pièce *Les Loups* (1898), il est fidèle à sa vocation "mystique", si l'on peut dire. Conformément à son *Credo quia verum*, il écrit des pièces qui expriment le rythme de la Vie et le rôle de la Foi.

Que ce soit les quelques pièces encore inédites (*Orsino*, *Les Baglioni*, *Niobé*, *Le Siège de Mantoue*, *Jeanne de Piennes*) ou les pièces publiées (*Saint Louis*, *Aert*) Romain Rolland se fait le chantre de la Vie. Et s'il vient en 1895-1897 à douter de la société de son temps, qu'il voit livrée à la décadence, il exalte, en contrepartie, sa propre foi et son esprit religieux, en écrivant un *Savonarole* inachevé. C'est l'époque où il découvre Mazzini et le socialisme, qu'il regarde non comme une politique, mais comme une Foi capable de régénérer la société et lui insuffler une vie nouvelle.

Quand il s'engage, pour la première fois, avec *Les Loups* (1898), en pleine affaire Dreyfus, il tente d'ailleurs d'élargir le débat, soucieux de montrer le heurt de deux fois respectables aux prises dans un conflit cornélien : la foi en la patrie, la foi en la justice. Romain Rolland s'efforce de montrer que les ennemis ont

p. 114.

5. Lettre publiée dans le *Bulletin de l'Association des Amis de Romain Rolland*, n^{os} 51-52, juin 1960, p. 39.

droit au respect mutuel, au nom de la foi qui les anime. C'est dans ce même esprit qu'il écrit les premières pièces de son "Théâtre de la Révolution" : *Le Triomphe de la raison* (1899), *Danton* (1900), *Le Quatorze Juillet* (1901) ; il voit dans la Révolution une convulsion de l'Histoire et il veut, épousant les passions des héros, faire sentir le mouvement qui les emporte.

Délaissant le théâtre, il écrit alors son premier grand roman, *Jean-Christophe* (1903-1912). On y retrouve le même souffle, mais Romain Rolland s'attache surtout à montrer un moi qui peu à peu s'éveille et prend conscience de son être, tout en étant relié au grand Tout dont il fait partie. La conscience de Christophe naît au bord du Rhin et, à sa mort, Christophe rejoint le grand Océan. Le roman se déroule ainsi sur plusieurs plans. D'un côté, la vie de tous les jours, et les accidents de la vie temporelle ; cela amène le romancier à se faire l'historien du présent et à observer l'histoire en mouvement. D'un autre côté, la vie profonde, vraie, de Christophe, qui découvre très tôt qu'il existe un autre monde ; cela commence à l'église quand il est enfant, puis se poursuit quand, adolescent, il a une subite révélation : "Le voile se déchira. Ce fut un éblouissement. A la lueur de l'éclair, il vit, au fond de la nuit, il vit - il fut le Dieu."⁶ Toute sa vie Christophe Krafft exprimera cette Force et cette Vie, celle du Dieu qu'il porte.

Ainsi, menant, en quelque sorte, cette vie double, Jean-Christophe peut se mêler à la vie de son temps, tout en conservant un regard détaché. On constate que, comme son créateur, le héros, après s'être engagé dans les luttes, s'est retiré

6. Romain Rolland, *Jean-Christophe*. édition en un volume. Albin Michel, 1966, p. 264.

de l'action, à partir du *Buisson ardent* ; s'il a exalté tout ce qui est foi ardente, élan de vie, régénération morale, combat pour un monde nouveau, il s'est mis, à la fin de sa vie, au service de l'art, refusant que celui-ci soit enrôlé au service d'un parti⁷. Romain Rolland pensait, ainsi, maintenir un juste équilibre.

Malgré les apparences, durant la première guerre mondiale Romain Rolland ne s'engage pas véritablement dans une action politique. Ainsi qu'il le fait remarquer à Marcel Martinet dans sa lettre du 10 novembre 1914 : "Je ne suis pas un homme d'action. Si je l'avais été, je l'eusse montré, d'autre façon que je n'ai fait."⁸ Après avoir analysé la situation et rappelé l'exemple du Christ et de ses disciples Romain Rolland conclut ainsi cette lettre : "A une foi nouvelle, il faut pour la fonder des pierres inébranlables, de grandes âmes de foi, des âmes qui, comme celles de ces premiers apôtres, soient capables de tout sacrifier [...] pour n'être qu'à leur foi. Ma mission n'est pas de travailler directement pour la cause socialiste (je n'appartiens à aucun parti). Mais je dois la servir, d'une façon indirecte, en cherchant à grouper une élite d'esprits qui soit vraiment au-dessus de tous les préjugés de partis et de patries."⁹

Ne pas s'affilier à une cause, plaider pour la liberté et la défendre, aider les autres à rester lucides, c'était reprendre le combat de Christophe et d'Olivier. Ce sera la ligne de conduite de Romain Rolland durant les années de guerre. Sans doute salue-t-il, en 1917, "la Russie libre et libératrice", mais c'est aussitôt pour la

7. Voir *ibid.*, p. 1287.

8. *Journal des années de guerre, op. cit.*, p. 115.

9. *Ibid.*, p. 116.

mettre en garde contre les excès où la Révolution française était tombée. Et, le 9 janvier 1918, il précise à Henri Guilbeaux qui veut l'enrégimenter du côté des bolchevicks :

"La liberté à laquelle j'ai voué mon amour et mon énergie tout entière est la liberté morale. Elle ne se trouve pas plus assurée par le socialisme ou le bolchevisme que par le capitalisme. Le socialisme et le bolchevisme accomplissent, dans le domaine matériel, une oeuvre nécessaire, mais insuffisante dans le domaine de l'esprit. Et trop souvent, ils foulent aux pieds cette liberté morale qui, pour moi, donne à la vie son seul prix. [...] Moi, je suis avec Érasme et Montaigne, qui se sont retirés de l'action, pour mieux combattre. Et j'estime qu'ils ont agi plus efficacement que les Réformateurs pour la liberté future de l'humanité."¹⁰

Il est l'homme de l'indépendance de l'Esprit qu'il veut maintenir coûte que coûte. Il refuse le bolchevisme et, avec Georges Duhamel, il s'oppose à Henri Barbusse et à Paul Vaillant-Couturier. Son engagement se refuse à être politique :

"La seule chose à laquelle je m'intéresse, en tant qu'intellectuel, c'est la libre recherche de la vérité. Elle n'est pas plus favorisée sous un régime que sous un autre. Clemenceau l'opprime, Lénine l'opprime, tout État fondé sur la suprématie majoritaire l'opprime, et ... sur la dictature minoritaire, encore plus. La lutte sociale est une chose ; les combats de l'esprit en sont une autre. [...]"

Je maintiendrai toujours l'Internationale de l'Esprit en dehors de la 2^e, de la 3^e, ou de la 4^e Internationale de l'Action.

10. *Ibid.*, p. 1389-1390.

Ce sont des mondes qui ne sont pas juxtaposables. [...] L'Internationale de l'Esprit [...] se refuse à tout unitarisme officiel et commandé d'État, d'Église ou de Parti.¹¹

Romain Rolland ne s'engage pas dans la lutte sociale. Écrivain, il veut agir par ses ouvrages : "Un livre vaut une armée."¹² Il publie en 1919 *Lituli*, en 1920 *Pierre et Luce* et *Clerambault* ; ce dernier livre met en scène un homme qui, pendant la guerre, après s'être laissé submerger par les passions de la foule, a réussi à s'en dégager ; il se dresse alors "homme de paix absolue et de libre conscience". La publication d'une pièce inachevée de 1897, *Les Vaincus*, est l'occasion d'une préface , datée de juillet 1921, explicite elle aussi : Romain Rolland se situe «au-dessus de la mêlée» : son devoir est "l'affirmation de l'âme libre, qui se refuse à transiger avec toute tyrannie, et dont la mission propre est de défendre contre les Réactions, comme contre les Révolutions, l'idéal sacré de la Liberté de l'Esprit"¹³.

Déçu par les violences de la Révolution russe, il n'accepte pas l'intolérance des partis. Dans sa controverse avec Barbusse, en 1921-1922, il refuse la dictature communiste, voulant "garder l'intégrité de [la] pensée libre, fût-ce contre la Révolution"¹⁴. Il quitte alors Paris et s'installe en Suisse, à Villeneuve.

11. Lettre à Jean-Richard Bloch, du 30 janvier 1920, publiée dans : Romain Rolland, "Journal inédit (1919-1920)", *Europe*, nos 439-440, p. 196-198.

12. Extrait d'une lettre à Jean-Richard Bloch, citée dans *Voyage à Moscou* de Romain Rolland, Introduction et notes de Bernard Duchatelet, Cahiers Romain Rolland, n° 29, Albin Michel, 1992, p. 36.

13. Romain Rolland, *Les Vaincus*, Editions «Lumière», Anvers, 1922, p. 16.

14. Lettre de Romain Rolland à Henri Barbusse du 2 février 1922, dans *Textes politiques, sociaux et philosophiques choisis* de Romain Rolland, Introduction et notes par Jean Albertini, Editions sociales, 1970, p. 216.

Il se remet au roman et commence *L'Ame enchantée*. Son projet est clair ; il l'exposera, une fois l'ouvrage terminé : Annette, l'héroïne, un être de tous les jours, en qui chacun peut se reconnaître, va vivre une vie ordinaire ; mais à cette vie, comme à celle de Christophe, s'ajoute, invisible, une autre vie, la vraie vie. Une note du 11 juin 1921 précise par quelles étapes doit passer Annette, quelles formes va revêtir sa vie, et en annonce ainsi la fin : "La cinquième forme, - la dernière (quand elle a atteint et déjà dépassé le point de maturité) - sera tournée vers Dieu - vers l'Infini. Ce sera une profonde vie mystique [...] dont rien ne transparait au dehors."¹⁵ Ainsi Annette mène, à l'insu de tous, une "existence souterraine" dont elle prend conscience de temps à autre, par éclairs, mais qui se dévoilera seulement à la fin, au moment du suprême "désenchantement". Romain Rolland a déjà prévu le futur Comte Bruno Chiarenza, le sage qui "sait juger des âmes et de leurs valeurs cachées" ; il note le 16 juillet 1921 : "Toute la métaphysique de l'oeuvre s'éclaire dans les entretiens finaux avec l'ami. Dans le reste de l'oeuvre, c'est la vie qui s'ignore, - la même vie pourtant, la même vie profonde, mais obscure, - qui s'explique à la fin."¹⁶ Romain Rolland reste fidèle à son *Credo* de 1888 : "La Mort, c'est la Vie toute puissante et parfaite. Elle me restitue mon être véritable. Elle achève de rompre l'illusion, dont j'ai peine à me rendre maître, pour me plonger dans la bienheureuse conscience de la Vie Universelle."¹⁷ Dans cet esprit Romain Rolland rédige *Annette et Sylvie* (1922), puis *L'Été* (1924) et

15. Note citée par Bernard Duchatelet, dans "Histoire et mystique dans *L'Annonciatrice*", *Cahiers du CERF XX*, Université de Brest, n° 1. 1985, p. 60.

16. *Ibid.*, p. 61.

17. *Le Cloître de la rue d'Ulm*, *op. cit.*, p. 377.

enfin *Mère et Fils* (1927).

C'est aussi l'époque où il se tourne vers l'Inde, s'intéressant en 1923 à Gandhi, dont il écrit une biographie. Il découvre en lui un révolutionnaire capable de transformer une société sans le recours à la violence. Il s'intéresse de plus près à l'Inde et publie, en 1929, *La Vie de Ramakrishna* et, en 1930, *La Vie de Vivekananda et l'évangile universel*. Dans la pensée religieuse de l'Inde il retrouve les grands mystiques de l'Occident et les philosophes présocratiques. Il retrouve, surtout, une source profonde à laquelle il n'a cessé de s'abreuver : le contact avec l'Être. Il approfondit ce sentiment, qu'il a toujours eu, d'une union indissoluble de l'être individuel avec le grand Tout, d'une appartenance à l'Universel, d'un sentiment "océanique", proprement mystique et religieux, dont il s'explique dans une lettre à Freud, le 5 décembre 1927. Ces deux livres sur Ramakrishna et Vivekananda lui permettent d'exprimer sa pensée la plus profonde : dans ces études, écrit-il à L. Van Tricht, le 1^{er} mars 1930, "l'auteur [...] a peut-être [...] livré plus sa pensée métaphysique et religieuse que dans aucun autre de ses livres"¹⁸.

Quand il reprend ensuite *L'Ame enchantée* Romain Rolland n'oublie pas le long voyage qu'il vient d'accomplir auprès des Indiens et l'approfondissement de sa propre pensée. Se remettant au travail, en octobre 1929, il ébauche diverses scènes et il revient au désenchantement d'Annette à la fin de sa vie, notant :

"Annette vit maintenant une double vie :

18. *Un beau visage à tous sens*, choix de lettres de Romain Rolland (1888-1944). Préface d'André Chamson, Cahiers Romain Rolland, n° 17, Albin Michel, 1966, p. 298-299.

- celle sur le plan des jours qui passent, dont elle fait encore partie [...]

- l'immensité intérieure qui peu à peu l'absorbe, monte comme une grande Nuit sereine, du fond de la vallée jusqu'aux âmes [...]

C'est alors qu'elle aura l'étonnante vision de l'anesthésiée (W. James), qui précède de peu sa fin.¹⁹

Depuis longtemps Romain Rolland connaît les idées du philosophe William James, que celui-ci a exprimées dans *L'Expérience religieuse*. Il retrouve un monde qui lui est familier, "l'expérience de l'Infini et de l'Illusion"²⁰ ; dans ce livre il a lu nombre de témoignages montrant l'âme individuelle absorbée par l'Être : "révélations", "visions" exprimant une extase religieuse où l'ego individuel se fond dans l'Ego sans limites, où le moi se perd dans l'Un, autant d'expériences mystiques qui rappellent les "samadhis (extases) caractérisés de l'Inde"²¹. Une des expériences signalées par W. James est cette "étonnante vision de l'anesthésiée", cellule d'où est issu le récit de l'agonie d'Annette.

Romain Rolland dit clairement que la mort d'Annette, fusion de l'âme individuelle avec l'Unité Cosmique, est une véritable extase mystique. D'autres notes soulignent aussi cet aspect ; telle celle-ci, du 28 juin 1930 : "Il ne faut point perdre de vue le but : à l'heure de la mort, l'âme se trouve nue, elle n'a plus rien, elle est seule sur le seuil."²² Ainsi, après avoir rejeté les derniers "enchantelements" qui l'ont tenue captive, Annette va peu à peu plonger dans l'Unité : "Aux yeux de ceux qui sont encore

19. Note citée dans "Histoire et mystique dans *L'Annonciatrice*", *loc. cit.*, p. 67.

20. Romain Rolland, *La Vie de Vivekananda*, Stock, 1930, rééd. 1966, p. 226.

21. *Ibid.*, p. 335.

22. Note citée dans "Histoire et mystique dans *L'Annonciatrice*", *loc. cit.*, p. 70.

engagés tout entiers dans l'«enchantement», elle s'éloigne étrangement.²³ Au moment de la mort l'âme, dégagée de toutes les formes, s'accouple à l'Être éternel, et ressent, dans «l'ombre noire», la révélation fascinante de l'identité avec lui²⁴.

Mais - et c'est ici un grand tournant dans la vie de Romain Rolland - pendant qu'il vit dans le "Songe indien", il se laisse "enchanter" par une grande "illusion". Depuis 1927 il hésite sur le jugement à porter sur la révolution russe. Après s'en être détaché, à cause de ses violences, il revient sur ses préventions. Peu à peu, il se rallie et pose à Gandhi la question : "Jusqu'à quel point est-il *raisonnable* et *humain* de *ne pas accepter* ? [...] Et, en loyale conscience, pouvons-nous assurer que ce sacrifice entier diminuera la somme de souffrances de l'humanité à venir, ou ne risque-t-elle pas de livrer ses destinées à la barbarie sans contrepoids ?"²⁵ Après une période d'incertitude il opte, enfin, pour le régime communiste et la révolution russe. Il croit que l'URSS sauvera l'Occident ; il accepte l'idée que l'avènement d'un monde nouveau ne peut se faire sans souffrances ; il ne combat plus la violence révolutionnaire.

Il n'éprouve pas trop de difficultés à concilier ses nouvelles positions avec sa réflexion sur la pensée religieuse océanique que l'Inde vient de lui rappeler. Puisque l'homme est partie de l'Être, il a son mot à dire. Après avoir connu l'identité avec l'Absolu, Ramakrishna est revenu vers les hommes et s'est mis à leur service. De même "la *Bhakti* chrétienne sait toujours

23. *Ibid.*, p. 71.

24. Note du 13 juillet 1930, *ibid.*, p. 72.

25. *Gandhi et Romain Rolland*, correspondance, extraits du Journal et textes divers, Cahiers Romain Rolland, n° 19, Albin Michel, 1969, p. 48.

s'arracher aux ravissements de l'extase pour servir le prochain²⁶. Reprenant en quelque sorte la leçon de Christophe, qui dans *Le Buisson ardent* voyait un Dieu en perpétuel combat avec soi-même, l'Humanité en train de se faire, Romain Rolland lance cet appel : "L'Homme n'est pas encore. Il sera. [...] Réveiller le Dieu dans l'homme. Re-créons l'Etre !"²⁷ Et Romain Rolland de préciser que "l'histoire n'est plus qu'un : *l'Un qui marche*".²⁸ A chacun de se décider : si l'homme veut créer sur la terre la "Cité de Dieu" il lui faut s'engager dans la lutte des hommes. Sans doute cette action est-elle un "enchantement", il n'en faut pas moins agir tout en sachant que l'essentiel est ailleurs.

L'influence de Marie Koudacheva, bolcheviste passionnée, dont il s'éprend en 1928 et qui s'installe définitivement à Villeneuve en 1931, l'amène à radicaliser son attitude et à se faire de plus en plus le défenseur de l'URSS, persuadé que là s'enfante le monde nouveau et que telle est "la marche même des événements, cette *Anangké*"²⁹ de l'Histoire. Le choix est pris, d'un engagement de plus en plus net aux côtés des communistes. En juin 1931 son "Adieu au passé" marque une rupture.

L'article d'avril 1932, "Goethe : Meurs et deviens !" montre clairement comment Romain Rolland concilie dorénavant son engagement politique et sa vision du monde. Faisant le portrait de Goethe, il parle de lui-même. Dans une synthèse hardie il fait se rejoindre Empédocle, Héraclite et Lénine ; le "Stirb und Werde !" de l'Allemand devient l'expression de "la loi de l'éternelle

26. *La Vie de Vivekananda, op. cit.*, p. 216.

27. *Ibid.*, p. 273.

28. *Ibid.*, p. 295.

29. Romain Rolland, *Quinze ans de combat (1919-1934)*, Rieder, 1935, p. 187-188.

*Métamorphose*³⁰. Romain Rolland l'applique à l'histoire de son temps et il identifie le monde nouveau qu'il voit naître en URSS avec le Destin en marche, avec l'Être. Comme Goethe, "puisque c'est son destin historique, il doit y obéir"³¹, et accepter le "cercle de fer du monde présent"³². L'âme reste libre, dans la mesure où reconnaissant la "Nécessité" qui l'emporte, elle échappe aux limites qu'impose le temps présent. Romain Rolland réussit alors à lier action politique et contemplation de l'Être.

Déjà le romancier avait intégré ces données dans l'oeuvre en cours. Une longue note du 6 décembre 1930 a établi la ligne générale du livre, présentant l'évolution de Marc, le fils d'Annette, et de sa mère vers la collectivité, c'est-à-dire leur adhésion au communisme. Cependant, malgré toutes les justifications idéologiques qu'il se donnait, Romain Rolland se cabrait : finalement Marc n'arrivera pas à trouver son équilibre. Romain Rolland reconnaît qu'en cela il traduit sa propre gêne : dans le fond du coeur, Marc est "mal à l'aise, déchiré" - "comme moi", note-t-il. Mais le romancier a prévu pour Annette l'attitude qu'il prêtera à Goethe en 1932 :

"Elle parviendra au terme suprême de l'âme libre et désenchantée : *qui est de se renoncer soi-même*. [...] A ce point, on touche directement les grandes lois cosmiques, et on se fond en elles. On comprend le rythme des marées, le flux des peuples et des sociétés, et on l'accepte, on ne reste pas en arrière, on participe à la grande vague. On n'en abdique rien de son libre et

30. Romain Rolland, *Compagnons de route*, nouvelle édition, Albin Michel, 1961, p. 140.

31. *Ibid.*, p. 143.

32. *Ibid.*, p. 146.

clair jugement. Mais on dit : «*Fiat voluntas !...*» Et l'on tâche de s'assimiler à cette volonté qui mène les mondes. La loi de violence et son matérialisme inhérent ressemble à une de ces lois physiques qui ont modelé la terre, par la glace ou par le feu. C'est au-delà du mal et du bien. Il faut s'y adapter, comme aux lois physiques, en tâchant d'en parer les effets dévastateurs, sans lui accorder une approbation ou un blâme inutile, mais en utilisant ses avalanches et ses inondations. [...] L'âme reste libre et sans colère (non sans pitié) au milieu de ces Révolutions de la nature.³³

Romain Rolland prend ainsi nettement parti et les deux derniers volumes de son roman, *La Mort d'un monde* et *L'Enfancement* (1933), portent la marque de cet engagement politique, mais d'un engagement auquel il donne une dimension mystique ; Annette puise ses forces "dans le rêve de L'Un"³⁴ : "L'un est un acte. L'Un est en marche."³⁵ Elle s'identifie au flot de l'Histoire.

Romain Rolland sait fort bien qu'il ne s'agit là que d'une dernière illusion, d'un "enchantement". Car, ainsi qu'il l'écrit à Roger Bessière le 7 mars 1933, si cet engagement permet "de se retremper dans l'océan de l'action des millions d'êtres, pour se renouveler et s'accomplir", il ne faut pas oublier que "ce ne sera pas l'étape dernière. Il y a un au-delà du combat social. Il y a toujours un au-delà ! C'est ce qui fait l'abondance et la joie inépuisable de la vie pour ceux qui en ont pénétré le secret."³⁶

33. Cette longue note du 6 décembre 1930 est citée en entier dans *Voyage à Moscou, op. cit.*, p. 60-62.

34. Romain Rolland, *L'Ame enchantée*, édition en un volume, Albin Michel, 1967, p. 1358.

35. *Ibid.*, p. 1359.

36. Lettre citée dans "Histoire et mystique dans *L'Annonciatrice*", *loc. cit.*, p. 79.

Ce "secret", n'est-ce pas lui qui, précisément, permet à la pensée de rester libre et de s'évader "hors du cercle de fer du destin présent" ? Il faut en revenir au portrait que Romain Rolland trace de Goethe : "Car il y a un bien autre Goethe ! Il est celui qui «aspire sans cesse au tout», celui qui est «lui-même un tout». [...] Lors donc qu'il a fait son choix d'action (ou de position) sociale ou politique pour le présent, il ne s'ensuit nullement qu'il n'envisage, soit pour une autre heure de l'histoire, soit pour un autre personnage, un choix tout différent."³⁷ Pas plus qu'Annette ne partage l'"enchantement" d'Assia "à cette nouvelle - puissante - chaîne sociale", Romain Rolland ne se laisse "enchanter" ; il veut garder - ainsi qu'il l'écrit à Roger Bessière - "la liberté profonde, insaisissable, de l'Esprit" ; du moins l'espère-t-il.

Durant les années 1930 Romain Rolland s'en est tenu à son choix : tandis que l'Occident a perdu son âme, estime-t-il, en URSS se bâtit une nouvelle humanité ; il se place du côté où est la vie. L'avènement du fascisme, en Italie d'abord, en Allemagne ensuite, l'ancre davantage dans sa défense de l'URSS. Toute son action et ses écrits sont marqués par cette double préoccupation : lutter contre le fascisme et défendre l'URSS. Il se trouve alors en bonne compagnie : Barbusse, Bloch, Gide, Guéhenno, Malraux mènent le même combat.

En 1935, - jusqu'alors sa santé ne lui a guère permis le déplacement - un an avant Gide, il peut enfin se rendre en URSS, à l'invitation de Gorki. Il ne peut guère voyager dans le pays et doit se contenter de séjourner à Moscou et chez Gorki. Visiteur

37. *Compagnons de route, op. cit.*, p. 146.

officiel, il a l'occasion de s'entretenir avec les grands du régime : Staline, Jagoda, Boukharine, Dimitrov, et d'évoquer avec eux des problèmes importants. Il reçoit de nombreux visiteurs et peut découvrir la réalité soviétique. Dans le Journal qu'il a tenu durant son séjour et les notes écrites au retour, il a dressé un bilan sans complaisance. Mais, décidé à défendre l'URSS de façon inconditionnelle, il tait ses réserves et ne publie que quelques pages louangeuses.

Romain Rolland assume les difficultés de son choix. Il ne veut pas renier son engagement. Voici ce qu'il écrivait le 20 avril 1935 à Jean-Paul Samson : "Je crois juste le but vers lequel elle tend, et nécessaire pour l'humanité qu'elle y atteigne - ou, pour parler plus modestement, qu'elle s'en approche. Mais je ne me porte pas garant des moyens que mettent en oeuvre ses hommes d'action. Je sais seulement que l'action met en présence, à tout moment, des problèmes terribles, où la seule position qui soit interdite est celle d'Hamlet - l'homme qui rêve, un crâne à la main. Il est trop clair que, [du point de vue] de l'action, c'est Fortinbras qui a raison. Pourvu seulement que sa route aille au vrai but ! - Je n'envie point Fortinbras. Je porte trop, au fond de mon coeur, le «*Grauen*» [l'horreur], ou le «*Mitleid*» [la compassion], de la tragédie de l'existence. - Mais contre moi, Fortinbras a raison."³⁸

Les années suivantes, malgré Fortinbras, Romain Rolland s'interroge. La mort de Gorki en juin 1936, les procès de Moscou en août 1936, puis en janvier 1937 et en mars 1938, le font réfléchir. A la différence d'un Gide ou d'un Guéhenno qui refusent

38. Extrait de lettre cité dans *Voyage à Moscou, op. cit.*, p. 82.

le régime stalinien et le condamnent, Romain Rolland ne dit officiellement rien. Mais ses illusions se dissipent ; le *Robespierre*, écrit en 1937-1938, pourrait bien être une façon détournée de juger le cours pris par la révolution russe, une manière aussi d'examen de conscience. Ce que Romain Rolland appelait précédemment la "Nécessité", le "Destin" devient ici "un ordre de choses". Mais où conduit-il les hommes ? Robespierre refuse de "demeurer dans un ordre de choses, où l'intrigue triomphe éternellement de la vérité, où la justice est un mensonge, où les passions les plus sordides occupent la place des intérêts sacrés de l'humanité"³⁹. Robespierre, ainsi, est un vaincu, dans la mesure où il a été l'instrument d'un destin qui s'est imposé à lui et l'a mené à trahir son propre idéal.

Ne serait-ce pas là, aussi, de la part de Romain Rolland, reconnaître qu'en acceptant trop facilement d'épouser le cours de l'Histoire, d'une histoire marxiste-léniniste, il se fourvoyait ? Avec *Robespierre* Romain Rolland reprend le perpétuel débat entre la Pensée et l'Action. "La vie ... qu'en ai-je fait ?... - s'écrie Robespierre - Non-sens ! Il me faut dire : qu'est-ce que la vie a fait de moi ? Car ce n'est pas cela que j'avais voulu."⁴⁰ Victime de "la force des choses" dont il s'est fait l'instrument, Robespierre reconnaît avoir subi un ordre : "cet ordre n'est pas inscrit, au fond de notre coeur. Il nous est imposé, du dehors. Il faut le dégager, au jour le jour, du noeud de serpents des événements [...] : ce sont les anneaux de l'implacable destin qui s'étirent. On ne peut pas leur échapper ; et quand on voit ce que ce destin a fait de nous, ce qu'il nous a contraints à accomplir, on se demande, épouvanté, ce qu'il

39. Romain Rolland, *Robespierre*, Albin Michel, 1939, p. 198.

40. *Ibid.*, p. 162.

exigera de nous demain.⁴¹ Qui parle ici ? Robespierre ou Romain Rolland ?

Au vrai Romain Rolland retrouve la question : quelle est la part de la liberté individuelle du moi, pris dans le flux de l'Histoire ? La liberté n'est-elle que la lucidité dans l'acceptation de la "force des choses" ? Ce serait un alibi facile. N'est-elle pas aussi refus et combat ?

La signature du pacte germano-soviétique, en août 1939, lui dessille définitivement les yeux. S'il gardait encore quelques illusions, elles tombent. Il comprend à quel point il a été dupe dans son engagement aux côtés de l'URSS. Il se rend compte qu'il a été infidèle à lui-même.

Dès lors, discrètement, mais avec fermeté, il prend ses distances avec le parti communiste français ; il se désengage et, dans son Journal, il fustige Staline et sa politique.

Depuis 1938 il a quitté la Suisse, s'est installé à Vézelay ; c'est là que l'homme, âgé de 72 ans, "au moment de rentrer dans le puissant songe cosmique qui est la substance de [s]a vie, [s]a foi, [s]a croyance invincible"⁴², revient sur lui-même, surtout à partir de 1939, et plus encore après le désastre que connaît la France en juin 1940.

Romain Rolland fait le point sur sa situation et, dans les pages qu'il ajoute alors à son "Périples" rédigé en 1924, il dresse sans complaisance le bilan des années qu'il vient de vivre. Il "n'essaie plus de [s]e donner raison"⁴³ ; il reconnaît qu'il s'est laissé

41. *Ibid.*, p. 163.

42. Romain Rolland, *Le Voyage intérieur*, Albin Michel, 1942, nouvelle édition, 1959, p. 296.

43. *Ibid.*, p. 240.

'enchanter' par la 'tragique *Maya* de l'existence'⁴⁴ ; il regrette que, pris dès 1929 par le combat, il n'ait pas su 'dominer par l'esprit le champ de bataille'⁴⁵. Il se retire de l'Action : 'Fini pour moi ! [...] l'ultime phase de la grande Illusion de ma vie est close. [...] Je me détache enfin des agitations fiévreuses de la fourmilière dont je fis partie.'⁴⁶

Il sait qu'il est au terme de sa vie ; il ne demande qu'à 'revenir au sein de ce Songe universel, qui est la plus réelle des réalités, et [à] en goûter par avance l'auguste paix'⁴⁷.

Il redevient le 'contemplatif' et retrouve sa vraie nature. A son ami Alphonse de Châteaubriant qui, à l'époque, se laisse entraîner dans l'action politique, dans une direction qu'il réprouve, Romain Rolland écrit, le 12 janvier 1942 : 'Ta vraie vocation - notre seul vrai devoir et notre mission, à nous, hommes de l'esprit, marqués par lui pour le servir, - est notre tâche de concentration et de création intellectuelle (coeur et esprit, - âme tout entière) - C'est par là seulement que nous sommes appelés à agir sur les hommes, lointains ou proches, au-delà des jours mortels que nous vivons. Toute autre tâche est imparfaite, - le plus souvent erronée (car elle ne répond pas au signe que nous portons marqué au front) - et, par suite, même fautive. J'ai eu le temps de faire là-dessus mes réflexions personnelles, depuis deux ans.'⁴⁸

Les années de Vézelay ne sont pas seulement le temps de l'examen de conscience et de l'aveu, elles sont aussi le

44. *Ibid.*, p. 291.

45. *Ibid.*, p. 294.

46. *Ibid.*, p. 295 et 297.

47. *Ibid.*, p. 297.

48. Lettre inédite. Copyright Chancellerie des Universités de Paris et Bibliothèque Nationale de France.

temps de la récapitulation et de l'approfondissement.

"Bloqué dans [s]a maison", "aux temps de la grande épreuve"⁴⁹, il revient sur son passé ; rassemblant des pages écrites en 1924-1925, il compose *Le Voyage intérieur* ; s'appuyant sur son Journal, il rédige ses *Mémoires*, jusqu'à l'année 1900, retraçant les étapes de sa vie. Puis, il reprend sa méditation sur Beethoven, écrivant les trois volumes de *La Cathédrale interrompue*. Dans cette musique, qui l'a accompagné toute sa vie, il retrouve une âme fraternelle, l'homme des combats qui cherche à harmoniser en lui les contraires et, enfin, arrive à la sérénité. En la Sonate pour piano en ut mineur, opus 111, il voit l'expression la plus pure de l'âme de Beethoven : aux combats qui labourent l'être et qu'exprime l'*Allegro* succède la sereine *Arietta*, "où l'esprit plane, comme d'une terrasse, sans effort, avec sûreté"⁵⁰. Pour Romain Rolland "cette *Arietta* [...] est une des paroles les plus hautes qui soient sorties de la bouche de Beethoven. Il y est vraiment maître de la vie, dans un calme souverain. Nulle autre part, même dans le thème de la Joie, il n'y réalise cette sérénité, dont la puissance se dissimule sous un sourire presque immobile de Bouddha."⁵¹ La fin de la Sonate exprime "la calme certitude de la lumière"⁵², "la plénitude de la paix"⁵³. Romain Rolland se plaît à montrer "le détachement des dernières oeuvres, l'âme seule avec son Dieu, qui joue avec les formes passagères et qui s'installe au coeur de

49. *Le Voyage intérieur*, op. cit., p. 11.

50. Romain Rolland, *Beethoven. Les grandes époques créatrices*, édition définitive, Albin Michel, 1966, p. 804.

51. *Ibid.*, p. 864.

52. *Ibid.*, p. 804.

53. *Ibid.*, p. 816.

l'Être⁵⁴. Pense-t-il à lui en traçant ces quelques mots ?

On voit sans peine la continuité de la pensée de Romain Rolland depuis le *Credo quia verum*, pensée qui s'est exprimée dans *Jean-Christophe* et *L'Âme enchantée*.

Ainsi, dans la claustration due à la guerre, malgré une santé chancelante et la maladie, Romain Rolland poursuit sa quête intérieure. Grâce à ceux qui l'entourent - notamment Jeanne Mortier qui lui parle de Teilhard de Chardin et du renouveau religieux, quelques dominicains dont le père Michel de Paillerets, le docteur Pillon, un ami de Vézelay - il découvre un catholicisme rajeuni. Malgré les objurgations de Claudel, qu'il retrouve grâce à Marie, et sa tentative pour se rapprocher du catholicisme, il "reste au seuil"⁵⁵. Il ne peut toutefois s'empêcher de réfléchir à la conception qu'il se fait de Dieu, de l'Être.

Quand il se met à travailler sur Péguy, désireux de rappeler les rapports qu'il a eus avec lui, il se laisse prendre au jeu et élargit son sujet : il veut entrer plus avant dans le mystère de celui dont il veut découvrir la métaphysique, "l'idée-force qui en est le foyer"⁵⁶. C'est en même temps une réflexion qu'il mène pour son compte. Sans accepter l'existence d'un Dieu personnel, il modifie sa conception des rapports entre le moi individuel et le Moi cosmique. Durant sa maladie de janvier-février 1943 il constate la "pauvreté morale du panthéisme" et se sent proche de "la source

54. *Ibid.*, p. 868.

55. Romain Rolland, *Au seuil de la dernière porte*. Correspondances et inédits (1936-1944). Entretiens sur les Évangiles. Introduction et annotation par Bernard Duchatelet, Les éditions du Cerf, 1989, p. 103. (Texte de mai 1942.)

56. Formule tirée d'un extrait d'une lettre à André Sabatier, du 11 décembre 1944, cité par Bernard Duchatelet dans "Le dernier jugement de Romain Rolland sur Péguy", *L'Amitié Charles Péguy*, n° 49, janvier-mars 1990, p. 58.

de l'Existence"⁵⁷.

S'il refuse la divinité du Christ, comme le montrent ses *Entretiens sur les Evangiles*, dernière oeuvre écrite en août-octobre 1944, son contact avec Péguy, Berdiaev et les métaphysiciens religieux de la liberté l'amène à préciser ses nouvelles conceptions ; il écrit en décembre 1944 :

"La Liberté, consubstantielle à Dieu. Le grand mystère des mystères. Sur le plan de la Création permanente, tout s'effectue - le bien, le mal - dans la Liberté. Chaque homme participe, dans la Liberté, à la Création qui continue jusqu'à la fin des temps.

Et d'autre part, le Christ est en agonie jusqu'à la fin des temps. Son sacrifice continue.

Il y a ainsi parallélisme entre l'acte permanent du Dieu qui crée le monde, et celui du Dieu qui s'immole, pour le sauver."⁵⁸

Ainsi, malgré les oscillations qui l'ont parfois ballotté à certaines périodes de sa vie, malgré ses contradictions, malgré ce qu'il appelait ses "*corsi e recorsi*"⁵⁹, cet homme complexe est parvenu à une harmonie. C'est ce à quoi Romain Rolland, avec lucidité et volonté, a, toute sa vie, tendu. Sans doute n'a-t-il pas ménagé sa peine pour entrer dans le combat social, sachant que telle n'était pas vraiment sa vraie nature ; mais c'était aussi une part de lui-même. Le 31 janvier il écrivait à Hermann Hesse : "Je n'ai pas vécu le rêve de ma vie, mais son destin. Et il n'a cessé de

57. *Au seuil de la dernière porte, op. cit.*, p. 124.

58. *Ibid.*, p. 202.

59. *Le Voyage intérieur, op. cit.*, p. 239.

m'imposer, à chaque étape où je pensais me reposer, de nouveaux combats. Jamais de repos. - Mais je finirai bien par le gagner ! Je l'ai acheté."⁶⁰

A Vézelay, non seulement il a gagné le repos, mais aussi un temps nouveau de réflexion. C'est à la fin de sa vie qu'il apparaît "tel qu'en lui-même". Sera-t-on étonné d'apprendre que, la nuit de Noël 1944, pendant que sa femme Marie et sa belle-mère, Adèle Cuvillier, assistaient à la messe de minuit à la Basilique Sainte Madeleine, Romain Rolland parlait de Beethoven à ses amis, Lucien et Viviane Bouillé. Soudain, il se leva, posa la main sur l'épaule de Lucien et lui dit : "Lucien, aidez-moi... allons servir notre Messe !" Et il se mit à jouer la Sonate pour piano en ut mineur, opus 111. Le récit que Lucien Bouillé a laissé de ce moment extraordinaire est émouvant⁶¹. Romain Rolland venait, une dernière fois, s'abreuver à "l'interminable source de force et de foi"⁶² ; communiant avec l'âme de Beethoven, il trouvait "la plénitude de la paix"⁶³.

"Finita comoedia", pourrait-on dire, reprenant le titre du troisième volume de *La Cathédrale interrompue*, faisant allusion aux derniers mots prononcés par Beethoven peu avant sa mort. Et le commentaire qu'en donnait Romain Rolland était prémonitoire : "Le rôle était joué, - le rôle d'illusions, de vaines passions, de

60. *D'une rive à l'autre*. Hermann Hesse et Romain Rolland. Correspondance et fragments de Journal. Introduction de Pierre Grappin, Cahiers Romain Rolland n° 21, Albin Michel, 1972, p. 160.

61. Voir dans : Romain Rolland - Lucien et Viviane Bouillé, *Correspondance, 1938-1944*, Edition établie, présentée et annotée par Bernard Duchatelet, Centre d'Etude des Correspondances, Faculté des Lettres de Brest, 1992, le "témoignage de Lucien Bouillé : Noël 1944", p. 164-171.

62. *Beethoven. Les grandes époques créatrices*, op. cit., p. 1343.

63. *Ibid.*, p. 816.

déceptions amères, de rêves, de créations imaginaires... Il les jugeait, d'un regard clair, calme et désabusé...⁶⁴

Quelques jours plus tard, Romain Rolland mourait.

64. *Ibid.*, p. 1318.

ユニテ 第二十二号

発行日 一九九五年三月三十一日

発行者 (財) ロマン・ロラン研究所

理事長 尾 埜 善 司

京都市左京区銀閣寺前町三三二

電話・FAX

(〇七五)七七一―三三二八―

郵便番号六〇六

印刷所

恒 星 社